

る。また手術療法を行うてから後にエックス線を用いたり、手術の前に用いたり、またラヂウムを手術前や手術後に用いたりするような様な考案をして、なるべく完全に癌腫を治すことに力を盡して居るのである。

癌腫の手術は癌腫がまだ餘り進んで居らぬ時期に行えば、その結果は手術の危険から見ても、全治すると云ふ方面から見ても著しく良いものである。病變が進んで居れば進んで居るだけ手術にも危険が多くなり、全治の見込も少くなるものである。それ故に癌腫の治療にはまだ病變の進まない間に手術をすると云うことが大切なことである。従つてその進まない時期に於て診断を決定せねばならぬ。早い時期に診断を決定するには疑わしい容態のある婦人がその容態のあつたときに時を移さず速かに醫師の診察を乞うことが必要である。

醫師の診断の結果が癌腫でないことと定まれば、それに適當した處置を受けられるが宜しいが、若し癌であることと定つて殊に全治すべき見込で

手術が出来得ると云ふようなときには、グヅ／＼せず速かに手術を受けよう決心せねばならぬ。

理會に乏しい人は癌腫が治り難い病氣であると云うことを聞けば、全く治らない病氣のように考えたり、醫師に診察を受ければ癌腫にされるから恐ろしいと云うような道理を外れた考えから、醫師が癌腫でないものを癌腫であると診定するかのようになり、陰部の診察を受けることが耻かしいと云うだけから引込み思案になつて、治療の時期を失うことが少くない。時によつてはその間に醫師でない人達の話などを信用して、まじないや、祈禱や、その他の方法を頼みにして大切な時間を無益に過して、病勢を進ませることなども少くはない。これ等は最も注意せねばならぬ大切なことである。

癌腫のときにそれを全治させる目的で行う手術は随分骨の折れる手術であつて、従つてその結果も今日では以前に比べれば著しい進歩をしたが、まだ手術のために起る危険が全くないとは云い得ぬのである。

から、信頼する醫師に全く一任してその指圖に従うようにすることが最も賢い方法である。

エックス線やラヂウムを用いて治療をするときにも同様であつて、それ等のものも有効な働きとともに幾分か有害な働きもあるのであるから、それ等の點に就いてよく理會して治療を受けねばならぬ。手術を恐れる餘りに、エックス線やラヂウムの治療を受けてもその利き目の方ばかりを聞いて、その危険のある方面のことを知らねば、時によつて不満足な感じを起すようなことがないとは云えぬ。これ等の治療法にも分量があり、體力の關係やその他のことを考えて用いねばならぬ。然し一方には難治の病を早く且つ完全に治さねばならぬのであるから、極力その目的を達するようにせねばならぬ。それ故にこれ等のものを用いる療法も決して手術療法を行うと異ならぬ苦心を要し、また患者の側でも醫師の指圖に従うて養生を守るのみならず、この治療法を行うときに必要である様々の他の治療法や検査などを受けねばな

らぬ。それ故にそれ等の治療法も入院して治療を受けることが最も宜しい方法である。

子宮癌はその病氣のある部分が次第に擴がるばかりでなく、隔つたところへ飛火することがある。この飛火は手術前から明かに認めて居ることもあるが、奥深いところに在るものは手術前には不明なことが多いので、手術時にはそのためにも力を用いねばならぬことがある。

この飛火は通例は淋巴腺に出来るのであつて、子宮の附近には淋巴腺が多數にあるから、その癌腫の飛火したと思われる腺を探し求めることは中々容易なことではなく、それを少しも故障なしに全部取り除くことも決して容易な業ではない。その飛火の多いような時には手に觸れぬ程度の細かい飛火が残る恐れが多いのであるから、手術後に再發する危険も多いと云わねばならぬ。

そのような再發の危険を防ぐために近頃では手術後にエックス線を用いて居るものがある。その成績はこれを用いないものよりは用いた

方が宜しいのである。然しこの方法を行うたから再發は絶対に防ぐことが出来ると云う程度にまで確かなものではない。

子宮癌を不治の病症のように考えることは各人の覺悟の上からは然るべきことであるかも知れぬが、今日ではその全治した人々も少くないのであつて、大體を云えば手術を受けた人の約三分の一位が全治して居るようであるから、凡ての病人が何れもよくなつたとは云えぬのであるが、猶ほ此上努力してその成功する場合の多くなることを望んで、専門の醫師は何れも力の限り安全に手術をして、その結果のよくなるために苦心して居る。従つてその成績は次第によくなつて居る。

その結果をよくするために最も大切なことは、前述の通り病氣のまだ進んで居らぬ内、即ち初期の間に手術をすることが必要である。初期に手術をするためには初期に診断をすることが必要であるから、醫師は務めてそれを早い時期に確診することに苦心をして居るのである。然し今日では目で視、指に觸れて診断をする他には、疑わしい組織の

一部分を取つて顕微鏡検査を行うことが手軽で最も確實である。この方法でも極く稀には見逃すことがないとは云えぬが、今日では最も確實な方法である。

癌腫の経過は速かなことが通例であるが、時によつては割合に緩慢なことがある。一般に云えば若い婦人程経過が速かである。妊娠と同時にあつたときにも進み方が速かであることが普通である。

子宮肉腫

その他に子宮には**子宮肉腫**などと稱へる悪性のものもあるが、これは子宮癌に比べれば甚だ稀なものである。容態は癌腫のときと大差はないから、確實な診断は組織の顕微鏡検査の結果によらねばならぬことが多い。

悪性絨毛上皮腫

今一つ子宮に起る悪性の瘤がある。これは**悪性絨毛上皮腫**と稱えて居るものであつて、多くは胎狀鬼胎の後に起るものであるが、流産・

早産や正常産などの後にも起らぬとは云えぬものである。

何れの出産にしても出産の後、どの位の時日を経過した後にこの瘤が出来るかと云うことは定まつて居らぬ。胞状鬼胎では一部又は殆んど全部が既にその出産のときにこの瘤になつて居ることもあり、出産後の悪露が全く止まらずに時々強い出血などが引續いて出来ることもあり、或は數ヶ月・數ヶ年の後に起つて來ることもある。時によつては妊娠とは全く関係のないように考えられることもある。

この瘤は胞衣の一部分である絨毛と云うものの病氣であつて、その出来る原因などはまだ全く明かではない。

主もな容態は不正な出血である。若し胞状鬼胎の出産や、流産などの後に不正な出血が繰返して起るようなときには、その分量の多少に拘らず疑いを容れるのであり、殊に貧血の状態が次第に加わることが通例であるから、貧血の加わるようなときには心配である。この瘤は子宮の口元のところに出来ることが稀であるために、確診するには

組織の顯微鏡検査を要することが多い。この瘤と疑われる場合にはその診断に用いる組織を取るためにも、稀れに著しい出血を起して來ることがあるから、入院して必要な検査を受けることが安全である。時によつては、その診断に用いる小さな組織を取るために行うた手輕な手術だけで強い出血が起つて、すぐに開腹などを行つて治療をせねばならぬ必要が起ることもある。

この瘤は子宮以外にも飛火して出来ることがある。その場所は一定しては居らぬ。腫に來ることもあり、肺臓・腦髓・肝臓などがその最も多く來るところである。既に飛火して居るようなものは今日では全治の困難であることが多いが、子宮のみに限られて居るようなときには全治し得ることが多い。然しこの病氣に罹つて居る人は貧血の強いため手術をするにも苦心をせねばならぬことが多い。肺に飛火したときは肺結核に似たような容態を起し、腦に飛火したときには屢々腦の中へ出血して腦溢血に似た容態を起すことが多い。

この瘤も癌と同様に危険の多いものである。殊に病症の進んで居るものは治療の道もない程であつて、手の盡しようがないこともあり、幸いに手術が出来る程度でも再發の危険がある。然し極く稀なことではあるが軽い手術を行うただけで全治したと云うこともある。通例は子宮や卵巣・卵管なども手術のときに取除くのである。

この病氣は子宮癌などよりも進み方の迅速であることを常とするから、一層早い時期に診断を付けて手術をすることには苦心を要する。それ故に若し胞状鬼胎や流産の後に不正な出血があつて貧血が次第に強くなるようなときには、躊躇せずに出来るだけ早く醫診を乞うことが最も當を得たことである。

不正な出血のあつた
とき

凡て不正な出血のあるときにはその分量の多少を問わず、速かに醫師の治療を乞うことは健康を保つ上から大切なことである。診察の結果憂慮すべき疾病でなかつたならば、それに適した療法を受ければ宜

しいが、若し上述の癌腫や、肉腫や、絨毛上皮腫のようなものであつたときには一日も早くそれに適當した處置を受けるようにせねばならぬ。これは病人自身のために大切なことである。

若し一度は心配する程の病氣でないと云われて、それが治つたにしても、再度同じような不正な出血が起つて來たときには再び速かに醫診を乞わねばならぬ。三度・四度繰返して同じ容態があつても前回が心配のない病氣であつたから、今度も同様であると定めてしまわずに繰返して醫診を求めねばならぬ。醫師の診定は多くはその診察した當時の状況によつて判断するものであるから、將來のことまで豫定の出來ぬことが通例であり、殊に癌腫などの診断に就いては將來のことまでも保證し得ないものであるから、そのことをよく心得て居らねばならぬ。

卵管の病氣

卵管は輸卵管又は喇叭管とも云う。子宮の兩側に在る細い管であつて、その太さは子宮に近い處は細くて次第に太くなつて居るものである。その細いところでは細い筆の軸位であり、太い方の端はじょうごの形のようなつて剪糸のようになつて居り、その内部の管は子宮に續いて居る。太い方の剪糸になつて居るじょうごのようなところで卵巢から出た卵子を受けて、それを子宮の方へ送る働きをするものである。受胎の出来るのは卵管の中であつて、受胎した卵は猶ほ子宮の方に送られて、子宮内面が受胎のために用意せられて居るところへ宿るのである。若し受胎卵がそこに宿らぬときには月經が起つて、その用意の出来たものは役に立たないで、更に次の排卵のときを待つようになることは既に述べた通りである。

若し受胎した卵が、子宮の方に送られる途中に道が狭くなつて居るならば、それより先きに進み得ぬようになつて、そこに宿るようになる。それが通例**子宮外妊娠**と稱えられて居る**卵管妊娠**である。子宮外妊娠のことは既に前に述べたから茲では省略する。

卵管炎は種々の細菌で起るものであるが、その中でも淋疾菌によつて起るものは随分多いものである。多くは子宮の方から卵管の方に及ぶものである。

卵管炎はそれのみが起ることは稀れてあるから、容態もその同時に起つて居る病症の種類や場處によつて様々である。或は卵管炎から他の病氣を起してその容態がともに現われることがある。

卵管炎の多くの場合には下腹の痛みがあり、その強さは様々の程度である。然しその痛みの程度で病氣の程度を定めることは出来ぬ。然し急性の炎症のときには痛みも強く熱も伴うことが通例である。

卵管炎

卵管炎は一側に限らず、両側に起ることもあり、それも殆んど同時に起ることが多い。容態は強い運動をしたり、性交や月経などのために募ることがある。卵管炎のときの痛みが時々強くなつて丁度陣痛の軽いときのようなものであることがある。その跡に水様か膿様の下り物が陰部から下りることもある。

慢性の卵管炎のときにはその痛みも熱も著しくなく、自分では殆んど病氣のような感じがなく、或は軽い下腹や腰の不快の感じや、月経時に幾分の容態などを感じ、或は性交の時やその後痛みを感じる位のこともある。

急性の卵管炎は屢々慢性のものになることがある。慢性の炎症は名前の通りにその経過が緩慢なことが通例であるから、長い間油断なく攝生を守つて引續いて治療を受けると云うことが随分困難であつて、一層その経過を緩慢にし、時によつては病症の再燃をすることさへ少くはない。

然し適當な治療と攝生とによつて、診察の上からは全く治つたような状況にまでなることは出来るが、その病症のために起つた變化の輕重によつて、様々の程度の障りを残すことが多い。或はその腫れが全く健康時の状況に復せず、卵管の近くに在る卵巢や、その他の組織にも同様に腫れを残して病勢だけは落付くことがあつて、病人自身は全く治つたと感じたり、或は僅かな容態を残すこともある。そのような状況では屢々再發をして來ることがないとは云えぬものである。

病症が長く續くときには月経不順になり或は不正出血になり、月経痛や月經過多などを起すようになり、下腹や腰の痛みや、釣れや、不快の感じなどがあつて、時にはその他に頭痛や、頭が重いつか、めまいがあるとか、食事の進まぬとか、嘔氣なども伴い一概に云へば神經質になることもある。

卵管炎の結果として剪線になつて居る部分が互に癒着して塞がり、その子宮の方に近い、細い部分でも卵管の管が塞がるときには、その

間の部分に膿や、水のようなものが溜ることがある。そのときには診察して見ると小さな瘤のようなものを卵管のあるべきところに觸れる。このように膿や水が溜つて瘤になつても、その兩端の癒着が不充分であれば、その内容が腹の中へ或は子宮の方へ流れて出ることがある。そのときに下腹の痛みを感ずることがある。若し子宮の方へ流れて出たときには、陰部からの下り物が増したと感ずる位のこととて、特別に心付かぬこともあるが、腹の中へ流れて出たときには、その流れ出た膿の中に元氣のよい細菌が混じて居れば腹膜炎を起すことがあつて重い容態を起すことがある。

卵管炎のときには今述べたような経過を取らないでも、卵管の一部を被うて居る腹膜や、子宮を被うて居る腹膜にも、すぐ傍に在る卵巢にも、また子宮と卵巢と卵管との間に在る組織にも同時に炎症を起すことが屢々である。そのときには卵管炎のみの容態でなくそれ等の容體をも伴うから、卵管炎のある場合にも子宮外膜炎であるとか、骨

盤腹膜炎であるとか、子宮周囲の組織の炎症であるとか、卵巢炎であるとか云うような診断を付けられることがある。

卵管炎は前にも述べた通り全治したように見受けられても、その管の中が狭くなつたり、或は癒着なども起つて管が全く塞がることもある。狭くなつたのみであれば、その程度によつては卵の通過を許さぬこともあるが、時には精子の通過は出来ることもある。癒着して居ることもあるが、時には精子の通過は出来ることもある。癒着して居るか、全く卵子も精子も通過を許さぬようであれば、その變化が一側だけであれば必ず不妊であるとは云い得ぬが、兩側ともであれば不妊症になるものである。

これ等の變化は成人になつた後に起るばかりでなく、幼児のときに外陰腫炎などに罹つたときに子宮や卵管までも病變が及ぶときには、本人の心付かぬ間に不妊の原因を與えて居ることがある。

今日では卵管が兩側とも疏通が完全であるか、一側だけ保たれて居るか、兩側ともに保たれて居らぬ、即ち兩側とも塞がつて居るかを判

断するために、子宮から卵管の方に空気を通じて、その時の気泡の出来る音を聴いて判断する**卵管通氣法**や、薬劑を子宮から卵管の方に注入してそれをエックス線で透視して判断する**卵管造影法**などが工夫せられて、多くの場合にこれを應用して診断の上に便利を得て居る。

卵管炎の原因は淋疾菌によることが最も多いと思われて居るが、結核菌やその他の細菌殊に化膿を起させる細菌など起ることがある。殊に産後に起るものなどには他の細菌によるものが少くはない。

治療のときに殊に急性卵管炎には安靜が第一に必要である。多くは陰部には格別の處置をせずに下腹に氷嚢を用いたり、浣腸などで便通を調べたりする位のこともある。そのときでも安靜は最も必要なことである。

その後病症の状況に應じて薬劑を用いたり、局所の手當を始める。然しその時期になつても安靜を守らせること殊に性交を禁じること、便通を調えること、食事の進むようにして營養をよくすることなどは

大切なことである。内服や外用の薬劑のみでなく、充分養生の方法を守らねば充分な治癒は望まれぬものである。殊にその経過に長い時日を要するために養生を疎かにしたり、治療を怠つたり、醫師を代えるものもある。そのように性急になつても中々抄取らぬものであり、病人も醫師もともに忍耐してよい結果に達することを心掛けることが最も大切である。

卵管炎の治療には時によつて病原菌の明かである場合にはその細菌の製劑、又はその明かでないときにもそれに應じて特殊の製劑を注射したりすることもある。常に良い結果を得ると定め難いが屢々奏效することがある。

その他には手術療法を行うこともある。これは種々の點から炎症が既に静まつて、若し膿などの在る場合でも恐らくはその膿のために起る危険が取り除かれたと認められる場合に行われるものである。その手術の目的は様々であつて時にはたゞ卵管の附近に在る癒着を剝すだ

けのこともあり、病變のある卵管を除き去ることもあり、卵管の塞が
つて居るものを疏通させるようにすることもある。多くはそれととも
に他の病變があればそれに對しても手術をするのである。それ故に卵
巢などを共に取り除くこともある。

急性の卵管炎のときでもその膿の溜つた部分が著しく大きくなつて
何れかえ破れる危険があると思われるときに、腫の方からか或は腹壁
の方などから、稀れには直腸の方から切開を加えて膿の流れ出ること
を容易くすることもある。

卵管には瘤の出来ることは極く稀れである。その中では癌腫が最も
多いのであるが、卵管の瘤として診断を付け得られぬことが多い。然
し子宮の附近殊に卵管か卵巢に出来て居る瘤として、手術を行うこと
が普通である。

癌腫

卵巢の病氣

排卵

卵巢は通例は胡桃位の大きさを子宮の兩側、卵管の後の方に各一
個づつ在る。卵子の發育するところであるから女子性器の中では主要
な役目をして居るものである。卵巢の中には卵子になるべき細胞は數
多く備えられてあるが、その中で通例は約一ヶ月に一個づつが次第に
成熟して卵巢から離れて出る。これを**排卵**と云うて居る。

排卵のときに卵巢から出た卵子が卵管に入り、それから子宮の方に
送られることは前にも述べたからここには略する。排卵がなければ通
例妊娠は起らぬものである。

排卵と月經とは同じように約一ヶ月に一回あるものであるが、その
時期は別々である。今日信用せられて居る説では次に來る月經の前十
二日から十六日の五日間のどの日に排卵するものである。その時に

下腹に軽い痛みを感じる人もある。この痛みを**中間痛**と云う。それと共に子宮の中に變化が起ることも前に述べた通りである。

卵が次第に發育して排卵せられるまでになる變化の順序は餘りに複雑であるからここには述べぬ。

卵には男子になるべき質を持つて居るものと、女子になるべき質を持つて居るものとあると云うことは研究の結果から唱えられて居るところであるが、今日ではまだこれを確かに決定することは出来ぬ。また一側の卵巣には男性のみ、他側には女性のみになるべき卵子を有するとか、一側には男性二と女性一の割合、他側には女性二と男性一の割合に卵子が發育するものであると云うような説を唱えて居るものもあるが、これも亦今日ではまだ確かに認められては居らぬ。このような説の當否を判断するには随分様々の點に注意をせねば誤りに陥るものであるから輕々しく信用してはならぬ。

卵巣炎

卵巣炎にも急性のものと慢性のものがある。産後に起るものには急性のものが多い。然し出産以外のときにも起らぬと云うのではない。何にしても急性の卵巣炎のときには卵管や子宮などのみならず、その他の部分にも同時に炎症を起して居ることが多いから、單獨に卵巣炎の容態を見ることが少く、下腹の痛みや發熱などが主なものである。それが経過した後は卵巣の表面に薄い膜の被いが出来て排卵を妨げたり、排卵があつても卵子が卵管の方に入ることが出来ぬようになることがある。また卵巣の組織が炎症のために強い變化を受けると卵が發育をすることの出来ぬようになることがある。

その他に卵巣炎の結果としては卵巣が膿を持つて、それが次第に大きくなることがある。それが幸いに次第に小さくなつて行くこともあるが、経過は甚だ緩慢なことが多く、その経過の間に時々再燃することもある。またその膿の溜つたものが腸の方や、膀胱の方や、陰部の方や、腹壁の方や、腹の中え破れることがある。腹の中え破れた時に

は多くは腹膜炎を起して甚だ危険であるが、腸の方などえ破れたときには幸いに都合のよい経過を取ることが多い。然し何れにしてもその経過は随分長びくために治療上に様々の困難のあることがある。それ故に手術の適當して居ると考えられるときには、手術によつてその膿の溜つて居る卵巣を腫から切開したり、開腹をして取り除くことが必要なこともある。その手術には多少の危険がないとは云えぬが、若し手術を受けずに捨置いて腹の中へても破れて腹膜炎を起せばその危険は著しく大きいのであるから、大きな危険を避けるためには餘儀ないことである。

手術をせずに治療をする方が適當であると考えられるときには、その経過は捗々しくないので普通であるから、醫師が全治したと認めるまで忍耐して攝生法を守つて治療を受けねばならぬ。只管に早く治りたいと思ふためにみだりに迷信に入つたり、口車に乗せられたりして、却つて経過を長引かせたり、不治の状況になつたり、危険を起しては

ならぬ。

慢性の卵巣炎と診断せられて居るものは多くは卵管の慢性炎などと同時に在るもので、或は小さい卵巣の化膿と伴うて居ることもある。容態はその同時に在る病氣の種類や状況によつて様々であり、経過は随分緩慢なものである。時によつては手術療法を行わねば根本的には治らぬものもある。

慢性卵巣炎と考えられて居るものの中に卵巣自身は萎縮して硬くなつて、水様の液などを内容にした、大小不同の腫れ物になつて居ることもある。それを起して來る原因は多様であつて、今日まだ充分に明かではないが、その中には急性卵巣炎の結果であるものもある。

この場合には容態は多種多様であつて、少しも容態のないこともあり、下腹や腰の痛みや異常の感じがあつたり、頭が重く頭痛・めまいがあり、その他食事や便通の障りなどもあつて、月經の時には様々の障りを起すこともあり、その分量が多くなつたり、少くなつたり、痛

慢性卵巣炎

卵巣腫

みを伴うたりすることもあり、或は不正な子宮出血を起すこともある。時によつて卵巣の部分に痛みを覚え、殊に治療のときに壓えれば痛みのあることもあるが、多くは同時に在る他の病氣の容態である。然し全く卵巣やその附近に著しい變化を認めないに關わらず痛みを覺えることもある。これは**卵巣痛**と稱えて居つて神経質の婦人の一つの容態と考えられて居る位である。

これ等の容態は速かに治りにくいものであるが、その原因と考えられるものが明かに分つたときには、その治療を行うと同時に婦人科の治療を行うものである。その治療の中には薬剤を塗布したり、内服やその他の用い方をしたり、罨法や、坐浴のようなものや、電氣を用いる治療法の様々の用い方などをする。然し時によつては手術療法を行ううてその小さい腫れ物を取り去らねばならぬこともある。

卵巣には種々の瘤が出来る。前に述べた小さい囊腫などの他に随分

卵巣腫

大きくなる囊腫もある。

一般に**卵巣囊腫**と稱えて居るものの中にも多くの種類を區別するのであり、その大きさも様々であつて、大きなものは成人の頭の大きさよりも大きいものもある。

卵巣囊腫の内容は水の様で色もなく透き通つたものもあるが、粘くて寒天か葛湯のようなものもあり、色も血のような色のものもあり、褐色のものもあり、白く濁つたものもある。時によつては脂のようなものや毛髪などを交えて居るものもあり、袋の一部に骨や齒のようなものがあることもある。

餘り大きくない間は容態は全くないか、極めて軽いものであるが、次第に大きくなれば、骨盤の中や腹の中を押領して、そのために腸やその他のものを壓え付けたり、引張り上げたりするために様々の容態を起すことがある。その容體は瘤の大きさや、成長の方向などで差があり、若し瘤の出来るより前に他の病氣のあつたときにも差がある。

診察の上で卵巣嚢腫と診断したものにも、その性質が多種であるが、その決定は多くは手術の後に肉眼でその瘤を見て定めたり、或は瘤の一片を取つて顕微鏡検査をして定めるのである。腹壁の外から診察したのみでその細かい性質まで見透しを付けることは出来ぬことが普通である。

通例卵巣嚢腫は手術によつて取り除くことが最もよい方法である。その手術は子宮筋腫や子宮癌腫などの手術よりも危険の少ないものであるが、然し時によつては瘤の出来方や、周囲の組織との關係で手術の随分困難なことがある。然し今日では餘り複雑な關係になつて居るものでなければ大抵何れも手術が出来るのである。

若し前に卵巣やその附近に病氣があつたものや、卵巣嚢腫が出来てから餘り長い年月を経て居るものや、卵巣嚢腫が癌又はそれに似た悪い變化を起して居るものなどでは手術の完全に行われぬことがある。

卵巣乳嚢腫

卵巣嚢腫の中でも**卵巣乳嚢腫**と云うのは癌腫に準ずべきものであつ

て、手術後に都合よく再發などを起さぬこともあるが、時によつては再發をしたり、再發したときには時によつて癌になつて居ることなどもある。

乳嚢腫のある種類のものは、瘤がまだ甚だ小さいに拘らず腹の中へ多量の水様の液が溜つて、卵巣の瘤は不明である程のときに腹水の大量であるために驚かされることもある。

卵巣嚢腫は時によつて腹の大きくなることを自分で心付いたり、他人に心付かれたり、偶然他の病氣の診察を受けて醫師から見出されたりすることが普通である。

治療法には手術して瘤を取り去るの他はないのであるが、診断が付いたらば、なるべく速かに手術を受けるが宜しい。極々稀れに自然に破れてその内容が腹の中へ流れ出して、それが自然に吸収せられて消えることもあるが、これは實際には萬に一つ位の珍しいことであるから、その様な偶然のことを頼みにせず速かに手術を受けることが尤

も賢い方法である。長く手術を受けずに捨置けば様々の障りが起り、後になつて手術を受けるときに困難を残す危険がある。自然に治ると云うような経過を取るとは普通には望まれぬものである。

若し手術療法を行うことが適當せぬことを醫師が認めた場合には、時によつて太い管針を刺して内容を除くことがある。然しこの方法は、大抵繰返して行わねばならぬものであるから、大抵手術の行い得られるときには手術を行うものである。稀れには餘り大きい瘤などの場合に手術の前に一回針を刺して内容の或る部分を除いて瘤を小さくした後、に手術を行うこともある。

卵巣嚢腫の中には腹の中で捻れることがある。そのときには通例強い腹痛があるもので、時によつては腹膜炎を起したのではないかと疑われることもある。これも速かに手術で取除いたが宜しい。またその内容が膿になることもある。稀れには腸に癒着して長い間に腸との間に交通が出来て糞便が嚢腫の内容になつて居つたこともある。

何れの場合にも大多数は手術を受けねばならぬものである。卵巣嚢腫は乳嚢腫であるか、又は癌腫に變つたような特殊な場合の外はその性質は悪性のもではないが、その大きくなるに従うて様々の容態が起り、身體も全體に弱り、矢張り生命に關する危険が起るものであるから、診断が付いたならば速かに手術を受けてその苦痛や心配から逃れねばならぬ。そのような場合に姑息な方法や迷信によつて、容易く安心して手術を受け得られる時期を失うてはならぬ。

癌腫・肉腫

卵巣にも癌腫も肉腫も出来る。これ等は何れも兩側の卵巣に起ることが多い。月経は變りないこともあるが、多くは少くなるか、無月経になる。稀れに多くなることもある。大抵腹水が溜るか、下肢の方にむくみが起るために心付くことが多いが、痛みは餘り強くないことが多い。下肢の方にむくみが起つたりすることは瘤がかなり大きくなつて居ることを示すものである。瘤は始めの間は自分では心付かぬこと

が普通である。

早い時期には手術を受けて全治することもあるが、多くは相當の大きさになり、附近え廣がつたり、飛火してから後であるから手術の結果も思わしからぬこともないとは云えぬ。

卵巣癌腫は多くは三十歳以上位の婦人に起るものであるが、肉腫は幼女にもこれを見ることがある。

その他に**卵巣纖維腫**であるとか、肉腫に似た**血管内被細胞腫**と稱えるものや、**卵巣囊腫**と全く同じような**副卵巣囊腫**と云うようなものがある。

その容態は何れも瘤が下腹に出来、時によつては腹水などが起り、凡ての容態は**卵巣囊腫**やその他の瘤と略々同じである。治療の方法は何れも手術療法が最も宜しいのである。

卵巣纖維腫
血管内被細胞腫
副卵巣囊腫

子宮周圍に起る病氣

骨盤の骨の管の中は脛や子宮・膀胱・直腸などの周圍には柔い組織が充ちて居るものである。その部分に様々の原因から炎症が起ることがある。その原因は通例種々の細菌であるが、最も多いものには化膿を起す細菌の種類であつて、産後に起ることが多い。

その炎症の起る場處や廣さは様々であるが、通例はその部分にのみ限られずに廣がり、その上骨盤の中の腹膜をも同時に侵すものであつて、容態は**熱と痛み**が主なものであつて、その炎症の起つた部分が硬く腫れる。それのみならず嘔氣があり、腹部が膨れ、殊にガスが腸の中に溜り、熱の昇降が甚だしく、その昇るときにはさむけやふるいを伴うこともある。時によつてはその経過が速かて上述の容態の外に全身にも色々の容態を起すことがあり、急劇に心臟の働きが不良にな

子宮周圍炎

子宮周圍に起る病氣

つたりして死亡することもある。幸いに急劇な變化を起さぬときにはその腫れが化膿して、それが腸の中や、その他の部分に破れて次第に治つて行くこともあるが、腹の中などえ破れたときには腹膜炎を起して急に容態が悪くなつて不幸に終ることもある。然しその腫れ物が破れずに次第に吸収せられて小さくなつて行くこともある。然しその経過は通例長びくものである。その間に様々の餘症などを起す危険がある。またその腫れも不養生などのために再燃して以前のような危険な容態を繰返すこともある。

この腫れ物は全く吸収することもあるが、時によつては或る程度まで吸収して小さくなつても、それ以上には小さくならぬことがある。これは多くは経過の長びくのに厭いて治療を怠つたり、或は種々の事情のために不攝生をしたためであることが多い。忍耐して充分に治療を加えたときには多くは全然吸収されて縮小することの望みが多い。その腫れが出来た始めには、子宮などはその腫れのため壓しのけら

れて居るが、腫れが次第に吸収せられて小さくなれば、子宮などは以前の位置に戻るべきである。然し縮小するときには多くは今まで腫れて居つた方に引き寄せられるようになつて、子宮の位置異常を起す原因になる。この吸収縮小は都合よく運ぶときには二・三週間で出来ることもあるが、多くは長びくものであつて時には數年を要することもあり、平均しても半年から一年位を要すると思われる。若し治療を怠り攝生を守らぬときには數年を経ても猶ほその残つた跡を認めることがある。

化膿した腫れ物が自潰して破れるときに、腹の中え破れたときには腹膜炎を起すことは既に述べたが、腸に破れたときには肛門から膿が出、膀胱に破れたときには尿とともに膿が出る。腫に破れたときには膿の多く交つた下り物が出る。時には外陰に破れて來ることもある。その他には腹壁であるが、そのときには腰の横骨の上のところか、臍のところが多いのである。若しそれ等の自潰があつて膿が外え出るよ

うになることは、その腫れ物の治るためには都合のよいことが多いのであるが、若し腹膜炎を起したり、腸に破れたときに腸の中に在る細菌のある種類のものでその腫れ物の方に害を與えたり、膀胱に破れたときにその破れた孔が容易に塞がらぬのみならず、尿がその孔から腫れ物の方へ漏れなどすれば、却つて容態を悪くすることがないとは云えぬ。またそれ等の経過は随分長びくことが多いから、その間に身體が衰弱して、色々の餘病を起す危険がないとは云えぬものである。

また幸いに腫れ物は吸収して縮小しても、そのために子宮の位置異常や、その他骨盤内に在る神経の道などに障りを起して、様々の痛みや、月経時の痛みを起したり、腸の位置を変えたために便秘その他の便通の困難が起つたり、尿道の方にも障りを起すことがある。

治療の方法は急劇な容態で起つたときには通例は絶対の安静を命じて痛みを軽くすることに努める。そのためには薬剤を用いることもあり、多くの場合には水嚢を用いる。その他には便秘でもあれば浣腸を

する。或は必要に應じ状況に應じてその他の治療法を用いるが、腫れ物の方にはなるべく手を付けぬことが多い。少し容態が落付いて來れば水嚢を止めて温罨法や濕布療法などを用いることもあり、局所の治療法も始まるのである。緩慢な経過を取つて居るものでも色々工夫して後害を貽すことの少いように苦心して治療の方法を考える。

腫れ物に膿の溜つて居るときには、なるべくは破れる以前に適當なときに適當な場所から切開を行うことがある。これによつて治癒の経過を短くし、且つその成績をよくすることが出来ることが普通である。緩慢な経過を取るときには屢々數月を経ても全治せぬことがあつて、患者自身は厭きることがある。然しそのようなときには醫師も忍耐してその好結果に達しようとして苦心して居るのであるから、双方心を合せてその全治することを努めねばならぬ。

骨盤腹膜の病氣

骨盤の中の一部を被うて居る腹膜は他の腹膜と同じであり、それに續いて居るものであるから、他の部分に腹膜炎が起るときには、多くの場合にはそれに伴うものである。また反對に骨盤の中に腹膜炎があればそれが全體の腹膜炎になることがある。

然し腹膜は僅かの刺戟を與えても互に癒着を起すことがあるから、或る部分に腹膜炎が起るとその附近の腹膜にも及んで、すぐに癒着してその病變が餘り廣くは廣がらぬようになることがある。それ故に時によつては一部分の腹膜炎から全部の腹膜炎を起すこともあるが、時によつては都合よく一部分だけに止まつて餘り廣がらぬこともある。

時々**子宮外膜炎**と云う診断を聞くことがあるが、これは子宮を被うて居る腹膜の炎症である。即ち骨盤腹膜炎の一部であるが、**子宮外膜**

子宮外膜炎

骨盤腹膜炎

炎の多くの場合には卵管の外を被うて居たり、子宮の兩側の部分に在る腹膜などにも炎症を起して居るから、寧ろ**骨盤腹膜炎**と稱える方が正しい位である。骨盤腹膜炎のときには子宮や、卵管や、卵巢などの炎症のみならず、子宮周囲の組織の炎症を同時に起して居ることが少くはない。

それ故にその容態も腹膜炎の容態のみではないことがあるが、通例は腹が膨れ、腹が痛み、熱が高く、嘔氣があり、口中が渴くと云うような容態がある。これは全部の腹膜炎のときにも來る容態であるが、骨盤内だけのときにはそのような劇しい容態は次第に落付いて下腹が幾分か弛み、熱も昇降があり、嘔氣も去るようになる。然し初めからそのような劇しい容態はなく、熱と下腹の痛み位で始まることもある。このような容態は短いときには二・三週長いときには數ヶ月に亙ることもあるが、一體に再燃し易いものであつて治療を廢したり、養生を疎かにしたりすることは出來ぬものである。

骨盤腹膜炎の病氣

二二三

この病氣の原因は矢張り細菌であることが多い。殊に産後などには化膿を起す細菌から起るものが多いが、その他のときには淋疾菌や結核菌から起るものもあり、その他の細菌から起るものもある。化膿性の細菌から起るものは急劇な容態で起るものが多く、淋疾菌で起るものも屢々劇しい容態で起るが、結核菌で起るものは多くは容態が軽く、時によつては殆んど自分では容態を感じぬようなこともあり、その上に結核菌のときには全體の腹膜炎であることが多い。

また蟲様突起炎のようなものときに腹膜炎を起して、それが全部の腹膜炎を起して、その一部として骨盤腹膜炎を起したり、或は蟲様突起の附近だけの腹膜炎を起したものが、骨盤の方えだけ廣がることもある。そのときにはその容態も病氣のある部分と、その進み方などによつて軽いこともあり、重いこともあり、容態のある場所も様々である。

治療の方法も腹膜炎を起した原因と、その軽いか、重いか、その病

氣の起つた部分や、経過などによつて様々であり、あるときには手術を行う必要のあることもあり、その手術を出来るだけ速かに行わねばならぬこともある。また腹部に管針を刺して腹水を取ることなどもある。手術をせぬ場合には薬剤を内服させたり、腹部から塗り薬などのようにして用いたり、罨法を用いたり、その外にエックス線や、太陽燈のようなものを用いることもあり、その容態と経過とによつて様々の方法を應用することがある。例えば胃や腸などに何等かの原因で孔が出来て、そのために急性の腹膜炎などを起したときには、時を移さずに手術を受けることが出来れば萬死に一生を得るようなことも全く望まれぬことではない。また腹膜炎のために骨盤内などに化膿した腫れ物の出来たときなどには腹部の方からか、陰部の方からか切開を加えてその膿を外部え導くこともあると云うように、その容態によつて、手術をするにしてもその方法が違ふものである。薬剤やその他のものを應用するにも同様である。

腹膜炎を起した後には腸と腸との間又は腸とその他の部分、又は子宮とその附近にある部分との間に癒着が起ることがある。そのために子宮や、卵管や、卵巣や、膀胱などの位置異常を起したり、引釣つたり、曲つたりさせることがある。そのために病中や病後に様々の容態を起すことがある。その最も多いものは下腹の痛みであるが、殊に身體を過度に動かしたときや、その後などに痛みを覺えることが多い。然し癒着があつても、何等の容態を起さぬこともある。

尿路の病氣

女子の尿道は膣の入口のすぐ前の方に口を開いて居るものである。それから膀胱の入口までは四種から五種位である。

尿道炎を起す最も多い原因は淋疾菌である。然し他の細菌で起ることがないのではない。軽いものは著しい容態を起さぬこともあるが、

尿道炎

腫物

通例は尿通のときに痛みを感じる。尿道を押えて見ても痛みがあり、尿道口からは膿が出る。そのために尿道口の附近にも腫れがあつたり、膿を持つたりすることがある。陰部の外方にもただれや、腫物が出来たりすることもある。稀れには尿道の周圍に膿を持つこともある。その他にも尿道に小さな腫物が出来て、尿通時に痛みがあり、出血をも伴うことがある。**癌腫**やその他の瘤が出来ること稀れに見ることである。

膀胱炎

膀胱炎も淋疾菌で起ることが多いものであるが、その他の細菌のためにも起ることがある。その中では大腸菌と稱える種類のものが最も多い。その他には結核菌のために起るものが割合に多い。その容態は通例尿通の近くなることと、それに伴う痛みが主なものであるが、それ以外に膀胱の部分の重い感じや痛みがあり、尿通のあつたすぐ後にも残るような感じなどがある。これ等の容態も軽いこ

ともあり重いこともあり、甚だしいときには安眠を得ぬことがある。時によつては熱を伴うこともある。

膀胱炎のときには尿の濁ることが普通である。然し慢性のものになつたり、治療を加えた後には、全く澄んで居る尿でも猶ほ顕微鏡検査で尿中に細菌のあることを認めることが少くはない。そのみならず慢性のものでは容態が極めて軽く、時によつては全くそれを感じないことがあるから、既に全治したと思つて居つてもまだ完全に治つて居らぬことが少くはない。その完全に治つたか否かを定めるには繰返して検尿をして細菌の見えぬことを確めた後でなければならぬ。

膀胱炎は時によつてある部分だけに残つて長く治らぬことがある。そのようなときには格別の容態もなく、尿も多くは澄んで居るために治療を怠つたり、不攝生をして、いつまでも治らぬことがあり、或は治つたものが再發したと思われようなこともある。また、膀胱炎も都合よく治るときには餘り長くない時日の間に全治するも

のであるが、時によつては數ヶ月又は一・二年も治らぬことがある。殊に淋疾菌に基くもの、大腸菌に基くもの、結核菌に基くものが長びくことが多い。膀胱炎のときには時々その尿を検査して細菌の増減の程度を考へて治療をすることが大切である。愈々尿中の細菌が繰返して數回の検査を行つても見えぬようになり、その他に異常なものが混つて居らぬことが確められたときに全治と考えるのであるから、通例はその時期は患者自身が容態を感じないために治つたように考へてから随分長い時日を経た後である。そのために患者自身には無駄に治療を受けて居るように感ずることも少くはない。

然し膀胱炎でも或る種類のもは膀胱を洗つたりすることは少く、膀胱へ藥劑を入れたり、内服藥を用いたり、時によつては注射を行うたり、或は攝生法を命ずるだけであることもある。それ等は診察の結果又は治療をして見た結果によるものである。

膀胱炎のときには冷えぬようにすること、殊に下腹や下肢を冷えぬ

ようにすることは病症の経過の悪くなることを防ぎ、治る方え導くために大切である。時によつては特に下腹などを温めることもある。また番茶やその他の飲物を多くして尿量と尿通とを多くすることも有利であることが多い。これは尿通が近くなつて毎回痛みなどの伴うときには、尿通を減じるために飲物を減じる方がよいと考へて居る人になり多いようであるが、多くの場合には多量の飲物を用いれば尿の分量が増すとともに薄くなつて、刺戟が少くなり、その上に膀胱を薬液で洗うことを補うことが出来て、病氣の経過を短くし苦痛を少くすることがある。

膀胱炎や尿道炎のときには酒類や、からし・とおがらし・わさびのような香料や、葱類のようなものを用いぬが宜しい。その他のもので心配であると思われれるものは醫師の意見に従うが宜しい。

腎盂炎

腎盂炎じんようえんと云う病氣は膀胱の病氣のときに續いて起ることのあるもの

であるが、時によつては腎盂の方が先きに病氣になつて膀胱の方が後に病氣になることもある。

原因は膀胱炎のときと殆んど同じである。

腎盂と云うのは腎臓で出来上つた尿が、その形は殆んど盃のようになったところに集まつて、それから細い筆軸位の太さの尿管を通じて膀胱に注ぐものである。その盃のようになった部分を云うのである。

腎臓は左右兩側に在つて脇腹の高いところに在る。

腎盂炎はその始まるときに通例は熱が出る。それ故に多くはさむけや、ふるいがあつて、痛みを一侧か或は兩側の脇腹に覺えるものである。然し脇腹に痛みがあつて、熱が出たからすぐに腎盂炎であるとは速断してはならぬ。それには尿の検査が大切であり、殊にその顯微鏡検査が望ましいことである。

この病氣は右か左か一方だけに起ることもあるが、時によつて兩側同時に、或は一方が先きて、一方が後に起ることもある。男子よりは

婦人が罹り易く、殊に妊娠中又は産後に起ることが相當に多い。然し小兒にも腎盂炎を起すことがある。

産後に起つたものは産褥熱などと思ひ違ひをすることもないではない。妊娠中に起つたものはその経過が他の場合よりも長びき易いように思はれる。また腎盂炎のために流産や早産を起すこともある。然し正常の時期に出産するものも少くはない。

腎盂炎も軽いものは三・四週位で全治することもあるが、多數は割合に長い時日を要する。最も長いものは一年以上二年にも及ぶことがある。通例少くも二・三ヶ月を要するものである。

これも膀胱炎などと同じく自分で容態を覺える期間が長くないために、全治するまで治療を續けることは随分怠屈を感じるものであつて、そのために全治せぬ間に治療を中止することが少くない。従つて再發を起すこともあり、一度腎盂炎に罹るとまたこれに罹り易いと云うことを聞くことがあるが、それは多くは全治したと思う程に著しく輕快

して居つたものが再燃した場合が少くはないと思われる。

治療法としては劇しい容態のある間は云うまでもなく安静を要するが、容態の落付くに従つて次第に身體を動かさせる。その他には局所に水囊やその他の罨法を用いたり、藥劑の内服や、注射をしたり、膀胱を洗うたり、藥を注入したり、時には膀胱の方から細い管を輸尿管に入れて腎盂にまで達して、そこを洗つたり、藥を注入することもある。

その他に腎臓にも色々の病氣が起り得るが、それ等のものはここては深く立入らずに内科又は外科の方に譲つて置く。その病氣の中には腎臓に膿を持つたり、或は他の病氣のためには腎臓を取り除かねばならぬこともある。

結石

腎臓にも、腎盂にも、尿管にも、膀胱にも、尿道にも**結石**と云うて

石の出来ることがある。これも通例その出来る場所の関係によつて容態には差があるが、多くは強い痛みを覚えるものであり、時には尿の中に血が混じることもある。

血尿

血を混じた尿は結石のときばかりではなく、腎臓炎のときでも、腎盂炎のときでも、膀胱炎などのときにでもこれを見ることがある。傷が出来たために出血する以外るときは多くはその病勢の強いときに誰が見ても血の色を示すこともあるが、血の色は見えずとも顕微鏡で調べれば血液の成分を混じて居ることが少くはない。その他に内科の病氣のときに血尿を起すものもある。

結石の出来たときにはそれが自然に排出せられる外には手術でそれを取り出すことが多いが、また時としては薬剤を用いて結石の出来ぬように又は結石の溶けるように工夫することもある。

癌腫等

膀胱にも癌腫やその他の瘤が出来ることがある。腎臓でも同じこと

である。これ等も手術を行つて切り取つたり、焼き切つたりすることがある。

腹部殊に子宮やその附近などに生じた膿のある腫れ物が膀胱に破れることがあることは前にも述べたが、そのときには尿の中に膿が混つて出る。あるときには全く膿ばかりのような尿の出ることもある。その破れた孔が都合よく塞がつて膿が膀胱の方へ出なくなれば膀胱炎の容態も次第に治る見込があるが、若しそれが永く塞がらぬときには、膀胱炎もその間は治る見込がない。またその孔から尿が膀胱の外へ流れ出ると、尿のために子宮の附近の組織などの中に炎症を起して、前にも述べた子宮周囲の組織の炎症を起して、随分重い容態を起すことも稀れにはある。

膀胱鏡

膀胱の中の變化は膀胱鏡と云う細い管になつた器械を用いて覗いて

見ることが出来る。また膀胱の中へ薬剤を塗つたり、小さな腫れ物などを切り開いたり、切り取つたりすることも出来る。その器械には簡単な構造のものと複雑なものもあり、更に膀胱から尿管に細い管を入れて腎盂にまで達することも出来る。

膀胱の中には醫師の用いる器械がその儘、または折れて滑り込んだり、或は戯れに、或は故意に、或は誤つて尿道に入れたものが滑り込むことがある。その外には陰部の方から手術したときの縫糸などの結び玉が膀胱の方に露出して居つたりすることもある。これ等はその品の形や、大きさや、その質などによつて結果は様々であり、その處置も様々であるが、通例はそれを取り除くようにするのである。膀胱の結石がそのような膀胱内に在るものを中心にして、その外側に出來ることもある。

女子の淋疾

女子の淋疾
淋疾菌

以上述べた様々の女子性器の病氣の原因に屢々淋疾菌を擧げたが、淋疾菌によつて起る性器の病氣は通例性交によつて傳わるものである。小兒の外陰腫炎は兩親又はその世話をして居る人の手などから傳染するものが多いのである。

淋疾は男子にも女子にも起り得るものであるが、女子の場合にはその性器の構造が複雑であるから、一度その病に罹ると全治に至ることは男子の場合よりも著しく困難なものである。従つて全治せぬ間に遂に治療を怠つたり、中止したりするものが少くないためにその全治することを一層困難にする。男子でも淋疾が尿道の後部や、膀胱の方にまで廣がつたものはその全治は中々困難であるが、女子でも尿道や、膀胱や、膣や、子宮などが侵されたときでもそれを全治させ難いもの

傳染

であるが、卵管などを侵し、腹膜にまで廣がつたものなどは一層全治させ難いものである。殊に自分の感じる容態は全くなくなつても、まだその病氣に罹つた場所には淋疾菌が残つて居つて、何時でも機會さえあれば病氣を再發させる傾きがあるのみならず、時によつてはその容態からは全治したと思われるに拘らず傳染をさせることがある。

それ故に夫婦の間に淋疾が起ると、屢々互にいつまでも傳染の交換をして居ることがあるから、その病氣の初發に兩人とも充分な治療を受けて全治して置くことが甚だ大切なことである。

淋疾傳染の最も多い機會は賣笑婦よりするものであることは云うまでもない。この點に就いては誰もよく知つて居ることであるが、實際にその傳染の機會を少くすることの困難であることは誠に慨わしいことであつて、同じ性病に屬するものでは淋疾のみならず梅毒の如きはその禍を子孫にまで伝えるものもあるから、性病の豫防に就いては各人がこの害毒の大きいことをよく理會して、各自に力を盡さなければ

ならぬものである。

女子に淋疾の傳染するには通例尿道と子宮頸管から最も多いのである。成人では外陰や膣は侵されぬことが多いが、外陰の兩側に化膿した腫れ物を生ずることがある。膀胱の淋疾菌に基く炎症は前にも述べた通り腎盂炎までも起すことがあるが、子宮頸管に起つたものも、深く子宮の奥の方から卵管や、卵巢に及び、遂には腹膜にまで及ぶことがある。その外に全身に擴がつて關節炎などまでも起すことがある。淋疾の進むには何等著しい容態がなくても次第に擴がるものであるが月經のときとか、過度の身體の勞作であるとか、出産・性交などがその播がるために都合のよい機會を與えることがある。

淋疾菌はその傳染を起した部分の組織の上層ばかりでなく、深いところにも侵入するものであるために、これを全治させることが困難なのである。數度の検査を繰返しても細菌が見えなくなつたと思われたときでも、まだ稀れにその後これを認めることがあつて、全治の確

定をするに苦しむことがある。繰返して行つた検査で淋疾菌を認めぬようになつたときにも猶更に擴がつたり、他に傳染させたりした實例もあるから中々油斷のならぬものである。

傳染の豫防

そのようなものであるからこの病氣の起らぬようにするには、淋疾に罹つて居るものとの性交を避けることである。若し良人が淋疾に罹つたとすれば、その全治するまで性交を避けるのである。若し婚約せんとする男子が性病に罹つたときにはその全治するのを待つて結婚することが正當である。若し知らない間に夫婦ともに淋疾に罹つたようなときには、何れもその全治するまで性交を避けねばならぬ。嘗て淋疾に罹つた男子が數年の後その全治を認められて結婚したに関わらず、その新婦に傳染せしめた實例も少くないから、これ等の點には特に留意を要することである。その他の實例では夫人が病弱なために二回まで離婚して第三回目の結婚をした人がある。その第三回目の夫人もま

た病弱になつたために醫診を求めたが、その病氣は淋疾に基く病氣であつた。これもまたその姑の意志によつて病弱であると云う理由のために離婚せられたと云うのである。この實例は多分はその配偶者の淋疾によつて發病したものであるべく、前二回の配偶者も同じような原因で病氣になつて、同じ運命を辿つたのではないかと思われる。これ等は誠に氣の毒な話であるが世間にはそれに類したことが餘り少くはなからうと思われる。この實例のようにその良人の不品行のために性病を伝えられて悲惨な生涯を送る女子が少くはないと思われるが、性病の豫防はその實行が困難なものであつて、單に法律の力などではその成功を期し難く、ただ各人の性病に関する知識が、その危険をよく知るようになつて、各自に警戒するようにならなければならぬと思われる。意馬の走るに任せただけに自分のみならず、配偶者にまで、或は子孫にまでその害毒を伝えることは、道義の上から見ても大きな罪悪である。

尿道炎・膀胱炎

淋疾のために尿道炎を起したり膀胱炎を起したりしたときには多くは尿通が近くなり、尿通の時に劇しい痛みがある。尿には膿が混つて、時によつては全く膿ばかりのように見える。尿道炎のみであつて膀胱の侵されて居らぬときには尿を二つの入れ物に分けて取れば、初めの方の分は濁つて、後の分は澄んで居る。

急性の尿道炎や膀胱炎は劇しい容態を起すものであるが、時によつて慢性の炎症になることもある。また始めから格別の容態を感じずに経過して慢性の炎症のように思われることもある。

外陰炎・膣炎

外陰炎や膣炎は成人には少いが、時によつて腫れてただれなどが出来ることもあり、かゆかつたり痛みを感じることもある。小兒に起ることは既に前にも述べたが、これは治療にも困難が伴い、治るにも時日を要する。殊に子宮や卵管まで擴がつたときには一層困難である。

子宮頸管の淋疾

子宮頸管の淋疾はその自覺する容態は割合に軽く、下腹か、骨盤の中などに重い感じや軽い痛みを感じて、下り物が膿のようになる。若

卵管炎

しそれが上の方にも擴がれば劇しい痛みを覺えて、多くは時を切つて痛む。然しそれも次第に軽くなつて下腹に不快な感じがあるだけ位で、只診察したときに痛むのみになる。

猶ほそれが一層奥に進めば卵管炎を起す。その容態は急性の卵管炎の容態であることが普通である。然しそれも徐々に進行して急性卵管炎の劇しい容態を起さずに、軽い下腹の痛みなどがあつて、劇しい發症のあつたときに始めて心付くようなことも稀れにはある。また卵管に膿の溜ることもある。

卵巣炎

卵巣をも侵すことがあれば、卵巣炎を起して屢々卵巣の膿の溜ることがある。腹膜にも擴がれば前述の腹膜炎の容態を起して來る。

腹膜炎

治療

治療法はその尿道や頸管のみを侵しただけの時期に充分にその目的を達し得られるときには全治の望みが甚だ多いのであるが、膀胱の方へても、また子宮の奥の方や、卵管その他にまで擴がつたときには、

その全治の目的を達することは非常に困難になる。殊に治療に長い時日を要するのみならず、治療の成績も不満足であつたり、その結果として不妊などを來すこともある。

治療の方法は病變の擴がり工合と、その輕重などによつて様々であるが、慢性炎などになつて居るものでは自覺の容態は取り去られても病氣のある部分の細菌を絶滅することが最も苦心するところである。そのためには屢々述べるように患者も醫師も皆ならぬ忍耐を要するものである。

不妊症

不妊症

夫婦の間に子を擧げることが出來ぬことは不幸であるから、屢々不妊のために醫診を求める婦人がある。學問上で不妊と云うのは全く妊娠せぬものを云うのであるが、同じような結果になるものに、妊娠は

するが流産したり早産して、生れた小兒は成育せぬと云うのもある。また月満ちて生れて暫くは育つたが、數日數ヶ月などの後に死亡したと云うのもある。また一人か二人か生んだがその後は全く妊娠せぬと云うのもある。爰では全く妊娠せぬものに就いて主にも女子の側のことを述べて見る。

全く妊娠せぬと云う原因は様々であるが、先づ第一には夫婦の間に兩人ともか、その何れか一人が所謂子種を持たぬことが原因であることがある。

女子が子種(成熟した卵子)を持たぬか否かを定めることは困難である。若し手術の機會でもあつて卵巣を見ることが出來れば判断の出來ることもあるが、その以外には様々の條件の下に推定をするだけである。

診察によつて卵巣の大きさなどを定めることが出來れば参考にはな

原因

卵子

不妊症

るが、これは常に容易であるとは云えぬ。また月經と女子の子種である卵子が卵巢から排出せられる排卵や、その他の卵巢の働きとは互に密接な関係のあるものであるから、月經が順調であり、その分量や、日數などが普通であれば、恐らく排卵の方にも異常はないと認める。然し月經が不順であるとか、少量であるとか云うようなことは、いつでも卵子の發育が不充分であると云う證據にはならぬ。世間では月經が少かつたり、それを見なかつたりするようなときには妊娠せぬと考えて居るものが多いが、それはその通りであることもある。然しいつでもその通りであるとは云い得ぬものであつて、時には治療などを加えて妊娠し得るようになることもあり、全く治療を加えずに妊娠することもあるから、そのようなときにも妊娠し得ないものと定めてしまふことは出来ぬものである。

時々見ることであるから世間でも知つて居ることであるが、月經がないときに妊娠することがある。最近にある醫學雜誌に報告せられた

例には一度も月經を見たことがなくて既に二回の妊娠をして無事に出産をしたものがある。それ故に月經の有無ばかりや、その少量であるとか、不順であると云うだけですぐに妊娠の見込がないと定めるのは早まり過ぎて居る。

子宮その他の性器の發育の不十分であるとき、即ち所謂發育不全であるときには妊娠し得ぬと速断するものがあるが、子宮の發育不全とともに卵巢にも著しい發育不全でもあれば、卵子の成育が出来ぬこともあるが、今述べる通り診察によつてその程度を定めることは随分困難であることが多い。子宮の發育不全の極く僅かな程度であると診断した婦人で實際に妊娠をした例は餘り少いとは云われぬ。

その次には男女の子種がその受胎の出来る状況である間に會合することが、妊娠には必要な條件であるが、その兩性の子種の會合するまでの途中に障りがあつて、全く進んで行くことが出来ぬか、或は餘り

性器の發育不全

受胎の妨げ

不妊症

二四七

長い時間を要するために受胎する力を失うことがある。

受胎の起るのは卵管の中であると考えられて居るから、女性の子種即ち卵子が成育しても、卵巢の表面などに障りがあつて卵管の方へ行かれぬことがある。また卵巢からは出ても卵管の方の口が塞がつて居たり、その管の中が閉ざれて居たりすれば先きえ進み得ぬことがある。

男性の子種の方から云えば、性交によつて女子性器の中へ進んだ精子(男性の子種)は子宮から卵管の方へ進むのであるが、その進んで行く途中に全く通り得ぬような障りがあれば、全然進むことが出来ぬから女性の卵子との會合は全く望みがないことになる。若しこれが極々細い道でもあれば辛うじて進んで行くこともあるかも知れぬ。その時には受胎し得ることも考え得られるが、多くは長い時間を要するために、精子も卵子もともに受胎し得る力がなくなるかも知れぬ。若し受胎が出来たとすれば、受胎した卵は子宮の方へ下つて来る必要があるが、精子の通過を許す位の程度の障りであつても、卵子殊に受胎した

卵子の通過を許さぬ程度であれば、その止められたところに受胎した卵が宿つて**子宮外妊娠**が起ることがある。

これ等の通過を妨げることは、子宮や卵管の發育不全などに伴うこともあるが、多くは病氣のためであり、殊に既に述べた炎症のためであり、卵管の炎症のために狭くなつたり、塞がつたり、折り曲げられたり、引伸ばされたり様々の變化を取つて居ることが多い。それ故に近來は卵管の通るか通らぬかを診断するために卵管通氣法や卵管造影法を用いて居ることは前にも述べた通りである。

卵管通氣法は子宮の方から空気を卵管内に送つて、そのために出来る空気の泡の音を聞き分けて、その通過を知るのである。**卵管造影法**は同じような方法で子宮から薬剤を卵管内に注入して、一定の時間の間にその薬剤が卵管を通過する状況をエックス線で透射して見るのである。これは通例はその状況を寫眞に取つて検査するのである。この造影法は卵管の通過性ばかりでなく、その太さや、子宮その他の關係

をも知ることが出来るから便利である。エックス線の透視又はその寫眞による診断の方法は様々の場合に應用せられて居るが、これによつて思わぬ診断の参考になることを知り得ることがあり、その障りを取り除いて妊娠の目的を達しさせるために手術その他の治療法を行い、或は受胎の全く絶望であることを知り得ることもある。然し多くの場合には卵管の通過性に妨げがあることが認められてもその程度や、處置をする方法などは、腹壁を開いた後に更に診断をしてそこで手術や處置の方法を工夫せねばならぬものである。

その他に**膣が塞が**つたり、狭くなつて居るために、**性交の不可能**であることもある。全く塞がつて居るときには手術して治すことも出来るが、妊娠し得るか否かはその塞がつて居るところより内部の性器に異常があるか否かに關係することが多い。狭くなつて居るときにも、その狭くなつた原因や、内部などの状況によつて、手術や處置をして

性交不能

子宮の位置異常

もその結果が異なるものである。稀れには子宮の口の塞がつて居ることもあるが、その全く塞がつて居るものが受胎を妨げることは云うまでもないが、その狭いものが受胎を妨げるか否かは多少の議論がある。餘り廣過ぎるものも受胎の障りになることがある。それ等は手術やその他の處置で治ることが多い。

その他に**子宮の位置異常**も受胎を妨げることがあると云われて居りそれは事實には相違ないが、絶対のものではない。位置異常のあるままて妊娠することも少くはないが、位置の正しいものよりも受胎する機會の少いものである。殊に位置異常に他の病氣を兼ねて居ることが多いから、それ等も同時に障りになつて居ることがある。子宮の位置異常の中では後屈又は後傾が多いものであるが、それは手術療法でなければ治らぬ。後屈や後傾以外の子宮の位置異常では手術療法を行はねばならぬものもあり、或はその必要のないものもある。同時に他の障りのあるものはそれも治療せねばならぬ。

不妊症

受胎卵著牀の妨げ

その他には受胎は出来ても受胎した卵が宿るところの準備に缺けて居るところがあれば、卵が宿り得ぬことがある。受胎した卵が子宮に宿ることを受胎卵の**子宮内著牀**と稱えて居る。この著牀を妨げるものは子宮の病氣である。その原因は様々であり容態も程度によつて様々であることは云うまでもない。**子宮内膜炎**などもその妨げになるもの一つである。然し内腹炎に罹つて居るものは凡て卵の著牀が出来ぬものであるとは定まつては居らぬ。時には著牀して大きな障りを起さず臨月まで成長することもあり、或は妊娠の途中で流産や、早産を起すこともある。また子宮内膜炎や頸管カタルなどのときに、下り物の性質が變つて居るために精子が受胎の力を失うこともある。

その他に猶ほ子宮などの病氣のために、男性の子種が女性の生殖器の中に進んで行つても、受胎するだけの力を持たぬように弱ることもあ

子宮内膜炎

血液の病氣
體質の異常

る。また血液に關する病氣や、體質の異常を起すような病氣のあるために、卵巢の働きに障りを興えて卵子が成熟にまで發育することが出来ず、従つて排卵を妨げることがある。これは女性に子種のないために妊娠し得ぬ部類に入るべきものである。

精神病

また**精神病**のときにも性交の出来ぬために受胎し得ぬようなこともある。凡て性交の不可能であるときには受胎し得ぬが普通である。

鎖陰

然し**鎖陰**の場合であつて妊娠した珍しい例もある。それは外陰から陰に入る入口は殆んど閉されて居つたが、内部の生殖器は尋常に發育して居つて月經もあつた。月經の血液は極く小さい孔がその閉されたところの一部分にあつて、その孔から漏れ出した。その孔は實に小さい孔で中から血が漏れ出すことに依つて辛うじて知り得られる位であつた。その婦人が結婚生活に在つたのであるが、その中に妊娠した。それは多分は男性の子種がその小さい孔から生殖器の内部に入り込んだも

のと考えるより他に考え方のないものであつた。出産のときにはその閉されて居る場所に手術を行つて大きな障りなく経過したのである。これは實に珍しい出来事であつて、不思議と云わねばならぬ位のことである。

性感の異常

世間では性に關する感じの不充分であつたり、全くないようなときに不妊であるように考へて居る人が多いようである。然し性感の乏しい女子でも妊娠した實例は少くないから、必ずしも全く絶望的に考へたり、そのために心配したりする必要はないものである。また性感のなかつたり弱かつたりするものも醫療で治ることも望みがある。

性感の乏しい反對に性感の餘り強いものも、時によつてそのために男性の子種の進んで行くことを妨げて不妊であることもある。

今一つは既に出産を経過して、そのために外陰などに傷が出来て陰部の入口の緩んだときにも妊娠の妨げになることもある。

兩性に於ける不妊の原因の割合

その他に原因になるものを挙げれば際限のない位であるから、この程度まで述べて、その餘は略して置くが、凡て不妊であるときには女子の方にばかりその原因の有無を調べるに止めぬが宜しい。時によつては男子の側にもその原因のあることがあるから、それもまた精細に調べて、その原因が何れの側に在るにしてもその原因の取り除き得られ、或は治し得られるときにはその方法を取らねばならぬ。或る人の調査では夫婦間の不妊の約三分の一は男子のみに原因があり、残りの三分の二の中でその半分、即ち全數の三分の一は女子側に障りがあるが、その原因が男子の性病に基いて居るものであり、残りの三分の一が全く女子の側のみにその原因があるものであつて、云い換えれば不妊のもの約三分の二は男子側にその原因があると云い得るのである。それ故に今日まで多くの人が不妊の原因が女子側に多いと思つて居つたことは反對になつたと云つてもよい位である。我國では昔から「子

なきものは去る」と云うて不妊であることは、認められた離婚の条件のようになって居つて、今日では法律上には認めて居らぬが、実際には時々應用せられて居るようである。この不文律は女子の方に不妊の原因があると認めて成立つて居るものであつて、今日の學説では改めねばならぬものと思われる。

その他に不妊の原因が一つではなくて、種々の原因が互に助け合つて不妊にすることがある。また不妊のために心配して憂鬱になつてそのため妊娠し難くなつたりすることもあり、妊娠を望む餘りに性交を屢々するために却つて不妊であることがある。

凡て不妊に對して治療をするにはなるべく年齢の加わらぬ間の方が成功することが多い。二十歳代と三十歳代とを比べれば二十歳代の方が結果のよいことが多い。またその治療の中には長い時日の間治療を要するものもあり、繰返して同じような治療を受けねばならぬことも

あるから、必要に応じて氣永く受療を要することがある。

受胎期

近時の學説に従えば**受胎する時期**は次に來るべき月經の前第十二日から第十九日の八日間であると云われて居る。それは排卵が月經前第十二日から第十六日までの五日間に在ると云う學説に基いて居るのである。その他の時期には性交があつても受胎せぬと云うのである。この學説の通りであるとすれば、月經前第十二日乃至十九日の期間に性交があれば受胎することがあり得るのである。然し排卵後受胎し得べき期間は極めて短く、精子の方は女性性器の中でも三日間位までは受胎させる力を保つて居るであろうと云う考えに基いて、第十二日乃至第十九日と云う期間が考えられたのである。その時期以外の性交は妊娠を望むものには、その目的を達せぬことになるのである。これに反してその期間を除いた他の時期に性交を行うことは避妊の目的は達し得られることになる。この期間を實際に定めることは月經の反復し

人工受胎法

て来る期間が常に一日も狂いのないときには容易であるが、あるときには二十八日目に、或るときには三十日目に、あるときには三十二日目にと云うようなときには決定には困るのである。それには大凡一ケ年間の毎回の月経の初日を記憶して置いて、その期間を定めねばならぬが、餘りその期間の不順が甚だしいときには、この決定は出来ても殆んど實行には役に立たぬようになることもある。この學説は近頃まで多くの學者から認められて居つた考えとは少し差があるが、この新しい説は恐らく正しいものであると考えられる。

不妊の場合に種々の治療を加えるが、その以外に人工受胎法或は人工妊娠法と稱えられて居るものがある。これは元來動物では以前から行われたことがあるが、人類にはまだ餘り多數には行われて居らぬ。然し人類に應用してその有効であつたと思われるものもあつて、時にはこれを試みることもあり得べきことである。然しそれをなるべく成

避妊

功するためには、充分な診査を夫婦の身體に就いて行い、手術を行うと同じ細かい注意の下に施術をせねばならぬから、耻かしいとか煩わしいとか云うような感じを取去つて、處置を受けねばならぬ。一回で成功することもあり得べきが、數回反復しても無効なこともあるべきものである。これは夫婦の間のみ行わるべきものであることは云うまでもない。

避妊

妊娠せぬことを心配して居るもののある反對に、妊娠せぬようにしたい、或は妊娠したものを取り除かねばならぬと云うこともある。妊娠せぬようにするのは、或る病氣に罹つて居る婦人が若し妊娠すればその病氣の経過を不良にして生命に危険を與えるか、著しく健康を害する恐れがあるときなどが最も多い。その他にも猶ほ様々必要な

場合もある。例えば遺傳する病氣の中のあるものなどでもその必要を見ることがある。それ等の妊娠せぬようにする必要のあることを定めるには主として醫學上から決定するものであるが、近年優生學の發達と共にその方面のことも考え、或は經濟上、社會上の點からも考えねばならぬこともあると思はれる。然し醫師のみで不妊にする必要のあることを決定するのは、醫學上から見て適當であると考えられるものだけである。

避妊の方法

その必要のあるときに行う方法も様々であるが、今日で最も多く用いられて居るのは、卵管の通過を妨げるようにする方法である。これは手術で卵管を通らぬようにして、兩性の子種の會合の出來ぬようにするのである。その他に卵巢を取り除いたり、卵巢にエックス線を働かせたりするものもあるが、卵管を通らぬようにしただけのものは、最も安全であり、そのために起る障りもなく、時によつては再びこれを正しく通過し得るように直すことも望まれるから、便利で安全であ

るとして最も多く用いられて居る。卵巢を取り除いたり、エックス線を用いたりする方法は、そのために様々の容態を起すことがないとは云えぬから、特別な場合の外は用いぬ方が安全であると思われる。その以外に藥品や器具などを用いる方法もあるが、何れもその効果が充分でないのと、その使用のために起る危害が多少ともあるものである。

近年産兒制限と云うことが世間の注意を惹いて、それを誤解したり曲解したりして、既に妊娠して居る胎兒を取り出すようなことまでをその中に入れて考えて居る人もあるが、それは誤つたことである。元來産兒制限と云う言葉はその意味は**受胎調節**とか**受胎制限**とか云うた方が宜しいと思われるが、結局は**受胎せぬよう**、**妊娠せぬよう**にすることを云うて居るものであつて、既に宿つて居る胎兒を取り除くと云うことではない。

今述べたように病氣などのために不妊にするのでなく、ただ各自の

受胎調節

禁忌

考えから受胎せぬようにするために色々の方法を用いて居るが、その成績は様々である。然し何れも多少の缺點を免れぬものであり、殊に金屬のピンのようなものを用いる方法などはそのために生命に關する程の危険まで起すこともある。最も安全な方法は所謂**禁忌**の方法である。これは性交を避けることである。これも前述の受胎時期と妊娠せぬ時期との關係をよく理會すればさまで困難なことではないのである。これ等の性交に關することはなるべく詳しく述べることを避けたいと思ふから、この以上は略して置く。

妊娠中絶

妊娠中絶

今述べた通りその結果は妊娠せぬようにすることと似て居るが、全く異なつたものは**妊娠中絶**である。

母親の病氣の容態が胎兒の生命に危害を與えて胎内で死亡したため

か、或は病氣のために妊娠の途中で陣痛が始まつて出産してしまふことがあるが、これは母親の病氣の容態を軽くして防ぐより外には方法はないのであるが、それとは異つて、時によつては母親の病氣が重態である上に妊娠して居るときに、妊娠のために母親の容態の悪くなつて生命の危険があるか、不治の状況になる見込のときに、胎兒を取り出せば輕快するか全治すると思われるときに、妊娠を中絶させることがある。これは**人工流産**とも稱えて居つて醫學上行うべきものであると認められて居る場合にのみ行うべきものであつて濫用すべきものではない。元來胎兒でも既に獨立した人間であり、ただその發育の途上に在つて、母親の體内に保育せられて居るものであるだけの差である。それも妊娠の五・六ヶ月から後になれば外部からも目立つて見られ、胎内でも胎兒の動くことを感じたりするから幾分か感じも變つて來るが、その以前は妊娠のために起るつわりなどの容態の外には著しい變りを感じぬから、生れ出た後の小兒程の感じを持たぬ人が多いので、

屢々胎兒に對する感じは既に生れた小兒と大いに異なることを見受けるものである。それ等の關係から胎兒の生命を犠牲にすることを割合に輕々しく考えられて居るように思われる。その上に近頃産兒制限と云う聲が高くなつたので、その意味を誤解して既に妊娠したときに、その妊娠を中絶させることも産兒制限の一つであると考えて居る人も少くはなく、この頃では一般に胎兒を下ろすことは差支えがないように考えて居る人もあるようである。然し妊娠の中絶は自然に起つたときはなるべく中絶せぬようにするより他に致し方がないとしても、それを特に起させるようにすることは、大切な胎兒の生命を犠牲にすることであつて、出来るだけ避けねばならぬことである。現行の法律にも死刑は規定せられては居るが適用せられる場合は極めて少いのであり、殺人の罪は死刑に處せられることになつて居るが、それでもかなり多くの場合にはこれを寛恕せられるようであり、人命を失わせることは重大なことであり、今の世の中に公然人の生命を奪うて罪になら

ぬのは、正當防衛の場合の他には醫師が醫學上適當であると認められるときに人工流産を行うことと、これも醫學上適用すべしと認められるときに、生きた胎兒の頭部を摧小して牽き出す手術と、これに類する手術などである。これ等の手術も出来るだけその應用を少くすることに努力することが、今日の醫師の正しい務めであると考えられるのである。

それ故に輕い疾病や、攝生と治療とによつて輕快に越く見込のあるようなときには、輕々しく人工流産などを行うてはならぬものである。ソビエト聯邦などでは經濟上や社會上の關係から小兒が多くて困るようなものにも、一定の規定の下に人工流産を行うて居り、その風潮が我國などにも幾分入り込んで來たのかも知れぬが、少くとも醫學上からは今日の醫學の狀況で止むを得ぬと認められるときにのみ行うべきものであり、醫學の進歩とともに次第にその適用すべき場合を減少することに努力すべきものであり、將來には醫學歴史の上に昔は人工

墮胎

流産を行うたこともあると云うような状況にしたいものである。

今日の刑法では**墮胎**の罪と云う個條があるが、これは人工流産を行つた場合の罪である。然し醫師が醫學上から見て正當に應用すべしと認められるような場合に行つたものは罪に問われることはないのである。然し醫師が行つたのも醫學上正當でない場合に行つたときや、醫師以外の人が行つたときなどには罪せられるのである。それを頼んだ人や手傳つた人も罪せられるのである。世間ではま、びくとかおろすとか稱えて居る人工流産の方法は大きな罪惡ではないと考へて居る人もあるようであるが、人の生命を失わせることが罪惡でないといふことは、何れの點から見ても承認することの出来ぬことであり、前にも述べた通り醫學上からもこれを適用することを全廢したいものであると切望して居るのである。猶ほその他に三ヶ月までの妊娠であれば、まだ人の形を備えて居らぬから、下ろしても差支えないといふような考へを

持つて居る人もあるようであるが、それも全く理由のないことであり、妊娠である以上は何時でも同じことである。

人工流産は軽い手術であると思われて居るが、時によつては重篤な病氣をその結果としてひき起すこともあり、輕々しく行つてはならぬものであり、時によつてはそのために終生の苦痛を残すこともある。殊に數回これを反復するようなことがあれば一層その他の危険までもある。現にソビエト聯邦で調査した結果を見てもそれ等の點が的確に證せられて居るのであるから、若しも受胎しては健康上の障りがあると考へられるために受胎を望まぬ場合には、前述の受胎期間に性交を避けることは最も便利であつて、他に障りを起すことのない方法であると思われる。月經の不順などのためにその實行の困難である場合には、醫學上から見て正當と思われるときには不妊になるようにする手術を行い得ることも前述の通りである。

婦人病の容態

帯下

婦人科に關する病氣のときの容態は様々ではあるが、その中でも最も多いものは陰部からの下り物である。女性性器殊に膣や、子宮には僅かな分泌物があるが、平生には外部にまで流れ出る程の分量はないことが普通である。それが増したと感ずるのは主にも膣や、子宮の口元の部分から出て来るものである。その下り物は帯下と稱えて居る。帯下には殆んど無色のもの、黄色を帯びて居るもの、血が線のようになつて交つて居るものなどがある。血の混じて居るのはただれや、その外の傷から来るものである。全く血のような色のものばかりになれば、通例それを出血と稱えて居る。

この帯下の増すことは多くは膣や子宮の口元に病氣のあるときであるが、それとともにそれ以外に病氣のあることもあつて、その病氣の

方が主にも治療を要するものであることもある。

以前には帯下の量が増したときには膣を洗つたこともあるが、今日ではそれを應用することは著しく稀れになつた。然し今日でも以前からの習慣で、世間でそれを應用して居る人も少くはないが、時によつては却つて病氣の経過を長引かせたり、悪くすることも無いとは云えぬから濫用せぬようにせねばならぬ。

膣には自淨作用がある

膣にはその健康な状況のときには、ある種類の細菌があつて、その種類のものは膣の中を清潔にする働きがあり、その細菌の盛んに發育して居る状態のときには、他の有害な細菌が膣内に入つてもそれを死滅させることが出来るものであつて、有害な細菌に對しては防禦をして居るものである。それ故に一概に細菌と云えば何れも有害のものばかりのように考へて居る人々には驚かれることであらう。それ故に病氣の状況などを考へて處置をせねば、無暗に洗滌をして有利な状況を却つて不利な状況にせぬとも限らぬのであるから濫用をしてはならぬ。

子宮癌などのときにも極く初期に帯下の増すことがある。その時期に診察によつて癌の存在を確め得ることもあるから、そのような容態のときには速かに醫診を受ける必要がある。若し繰返して同じような容態のときにも何度でも繰返して受診することを要する。帯下の増量ばかりでなく、血を混じて居たときには一層その必要が多い。帯下の多いために陰部の外側がかゆく感じたり、痛みがあつたり、ただれたりすることがある。そのときにも軽いときには微温湯で外側だけを清潔に洗つて、それをよく拭うた跡へ汗しらずのような粉末を散布して置くが宜しい。然し陰内を洗うことは醫師の指圖を俟つことを要する。外陰だけでもその位のことでよくならねば、なるべく速かに醫治を受けることを要する。

次には**月經の異常**であるが、月經は同じ位の間隔で繰返して来る。即ち順調であるべきものが、それが常に早くなり勝ちであつたり、遅

月經の異常

周期

持續日數

分量

無月經

れ勝ちであつたり、早くもなり、遅れもしたりするようなことがある。出血して居る期間も三・四日のこともあり、五・六日のこともあるが、毎回同じ位の期間續いて、同じ位の分量であればその點には異常がないが、時々日數も分量も狂うようなことがある。繰返して来る間隔即ち周期は二十八日即ち四週位が正常であると云われて居るが、實際には二十八日から三十日位のものが多いと思われる。殊に近頃調べられたものでは三十日目位に繰返すものが最も多數であつたこともある。何れにしても順序よく同じ間隔で来るか否かと云うことが大切である。

分量や續く日數のことも標準を得ることは容易ではないが、日數は四・五・六日位のものが多いようであり、分量は百乃至二百瓦位であるかと思われる。それよりも長く續いたり、短かかつたり、分量も著しく少いか、著しく多いときには異常である。

最も少いときは**全く月經のない**ことがある。今まで月經のあつたも

のが次第に減じたり、突然なくなつたりすることは異常であることは云うまでもない。妊娠時に月經の止まることを常とすることは誰も知つて居ることであるが、それ以外に月經の止まるのは性器の病氣や、他の器官に病氣があつて起つたり、また體質のために起ることもある。無月經のものには鼻・口・肺・皮膚・乳房その他から出血することもある。これは月經の分量の減少したものにも來ることがある。

月經時の苦痛

月經のときの苦痛は様々の程度である。少し氣分が重いと云う位のこともあり、全身がだるい位のこともある。また頭痛や、めまいや、食事が進まず、嘔き氣があるようなこともある。痛みは下腹や、骨盤の中から腿の方や、腰の方へ及ぶこともある。時には腰の痛みだけのこともある。その痛みの性質や程度も様々であり、軽いときには臥床を要せぬこともあるが、時には床に就かねばならぬこともある。それとともに様々の容態を伴うことがある。殊に子宮やその附近に大きな腫れや瘤があるものは、その大きくなることを感じたり、尿通の方に

異常を起すことなどもある。

苦痛の始まる時期は前にも述べた通り月經前一・二日からのこともあり、月經の始まるとともに始まることもあり、月經經過中に始まることもあり、月經の終る頃に始まることもある。容態のある期間も數時間位のこともあり數日のこともあるが、多くは月經の止むとともに減ずる。然し月經の終つた後一・二日間猶ほ容態のあることもある。

月經の始まる一週又は十日位以前から、毎日體温を測つて見ると軽い上昇を認めることがある。多くは午前・午後各一回の検温であれば午後三・四時の頃の検温で認めることである。温度は高いときでも攝氏の三十七度五分を超えぬものが多い。その原因は不明であるが、體質の薄弱に見える人に多いから、潜伏して居る結核のある一つの徴候であると考えて居る人もあるが、必ずしもそうであるとは思われぬ。同じような狀況が妊娠の初期にも在ることがあるから、これとともに猶ほ研究を要することであるが、それは何か月經や妊娠などと關係の

ある身體の中の働きの關係から起るものであつて、恐らくは心配せねばならぬものではあるまいと思われる。殊に妊娠初期に微熱があつて肺炎に病氣があると云われるような場合にも、或はこの微熱のあるために實際には病氣はないのであるに拘らず、肺炎などの變化が想像せられて描き出されるようなことがありはせぬかと思われぬでもない。然しこのような微熱のある人はその攝生にも注意して少しでも氣分の悪いと思われるときには用心をして醫診を乞われることは望ましいことである。今日はその原因が不明であつても、將來には何等かの病氣の前兆であると云うようなことに決定するかも知れぬから、用心に越したことはない。

月經の初潮は十五六歳の頃であるのが一般の平均であるが、時には十歳以前に初經があるものもあり、或は遅れて二十歳頃になつてから始まることもある。早期に月經のあるようなものは若い間に妊娠することがある。遅いものは通例月經が始まつてから後に妊娠するもので

あるが、前にも述べた通り一度も月經を見ることなしに繰返して二、三回も妊娠したと云う實例もあるから、月經の有無だけで妊娠し得るや否やの問題をすぐに決定することは出来ぬものである。近頃も十歳の女子が分娩した實例を聞いたが、これは既に妊娠前に月經は始まつて居つたものである。これ等は著しい早熟の實例である。

不正子宮出血

不正子宮出血と稱えて居るものは月經のような定まつた周期がなく、時々出血するものを云うて居り、その分量やその続く期間も一定して居らぬ。少いときには血を交えた帶下の程度であることもあり、多いときには著しい貧血の容態を起す程度のこともある。一回限りのこともあり、數日又は數週も續くこともあり、病氣や瘤などの狀況によつて様々である。時によつては著しい性器の病氣を認めずに他の器管や、血液の狀況や、體質のために出血することもある。

痛み

婦人性器の病氣のときに起る容態は帶下、月經の異常、不正出血などの他に猶ほ様々の痛みがある。病氣によつては全く痛みを感じぬものもあるが、多くはこれを訴えるものである。その痛みの性質は陣痛のように時を切つて締めるように痛むものもあり、或は針か錐でも刺すように痛むこともあり、ヅキ／＼と脈を打つように痛むことがあり、釣れるように痛むとか、ピク／＼痛むとか、滲むように痛むと云ふように様々の痛み方がある。また何か觸れたときだけ痛むことがある。即ち醫師が診察のときに壓えたり、動かしたりするときに痛むこともある。その痛みも劇しいこともあり、軽いこともあり、様々の程度がある。痛みの軽いときにはかゆみを感じたり、張るような感じてあつたり、ただ不快な重いような感じのすることなどがある。また壓えたときには痛まずに手を離すときに痛みを覺えることもある。

その痛みのある場處は下腹・腰などが多いが、その全部が痛むことがあるが、一方だけ痛むことがある。下腹でも臍のすぐ下や、その近

くの痛むこともあり、腰の骨のすぐ上が痛むこともある。腰の痛みでも腰骨の上の方や、腰骨の部分や或は、その下の方の部分、即ち腎の部分などの痛むことがある。その外には肛門又はその附近や、陰部の外の方の痛むこともある。また大便の通じるときや、小便の通じるときに痛むこともあり、その通じた後に痛むこともある。多くは痛みのある場所によつて病氣のある部分を推定することが出来るが、時によつて痛みを感じる場所と病氣のある場所と異なつて居ることもある。

また性器の病氣があれば必ず痛みがあるとは定まつては居らぬ。例えば子宮癌や、子宮筋腫や、卵巣囊腫でもかなり大きくなつて居つても全く痛みを感じぬことが屢々である。然し子宮筋腫などではその瘤の出来て居る場所の関係などのために強い痛みを感じることもある。殊に月經時に痛みを伴うことが多い。

然し下腹や腰の痛みのあるときに、それが必ず婦人の性器の病氣のためであると定めることは出来ぬが、所謂婦人病から来て居るものが

多いことは事實である。

その外特別なものは性交時の痛みである。これもその痛みの起る原因は様々であるから、それを考察せねばならぬが、これ等も本人からその痛みのあることを醫師に告げねば醫師はその痛みのあることを知り得ぬことが普通である。

それと同じように性交のときに感じのないものであるとか、その外の異常のあるときにも、醫診を受けるときにそれを醫師に告げねば、醫師はその方に考えを向け得ぬものである。この注意をする理由は醫師が婦人病を治療してその全治したことを告げるとともに、その病人からはまだ一度も性感や性交の異常のあることを醫師に告げたことがないに拘らず、それ等の障りまで取り去られたのであるかとの問を受けることがあつて、醫師の方では當惑することがある。これは醫師が本人からそれ等の障りのあることを聞取らずとも推察の出来るもので

性感

あると云う考えから出たことであろうが、醫師の方ではそこまでの神通力は持つて居らぬから、告げられたことだけをその障りのある全部と考へて處置を行うものであるから、病人の側としてはその容態に就いては耻かしいと感じても、障りや苦痛のある容態のすべてを醫師に話さなければ治療を完全にするには出来ぬのである。

尿通のときの痛みのことは今述べたが、尿通にはその他に度數の近くなることもあり、いきみの立つように近くなつたり、跡に残るような感じのすることもある。尿通がありそうで便所へ行つても容易に出ぬこともある。また全く尿の出ぬこともあり、絶えずダラ／＼と出て居るようなこともある。

その他には尿の濁つて居ることもあるが、その濁りは膿の交つて居ることもあり、その外の異常成分のためであることもある。また血を混じて居ることもあり、その分量や色も様々である。また内服したり

尿通の異常

注射したりその他の用い方をした薬剤などのために尿に色の付くこともあり、臭氣が特に強いこともある。これ等は食物のためにも起ることがある。普通尿通は一日四・五回の外に夜間一回位であるが、夜間には尿通のない人も多い。

便通の異常

大便の方では便秘が最も多い。殊に婦人には便秘の癖のある人が随分多いものである。大便は普通毎日一回位であることが適當であると思われるが、一日に二回位や、二日に一回位でも別段に便秘とか、便通が多いとか云う程ではないと思う。大便は譬えて見れば蒸氣罐の石炭の燃滓のようなものであるから、一定の時間にこれを排除することは身體の健康を保つ上に大切なことである。それ故に便秘の習慣のある人はそれを治して置くことは將來の健康の上から見ても大切である。それは續いて後に述べることにして先づ便通の障りのことを少し述べる。

便秘の甚だしいときにはそのために性器の血液の循環などにも障りを起して様々の容態を起すことがあり、殊に性器の病氣所謂婦人病に罹つて居るときには、便秘を疏通しただけで苦痛が少くなつたり、全くなくなつたりすることが少くはない。殊に月經の時に苦痛の多い人に便通を調えるようにしたためにその苦痛の取り去られたこともある。便秘の甚だしいものは十日も十五日も便通のないことがある。便秘は屢々いぼ痔や、きれ痔などの原因になることがあり、そのために出血を起したり、痛みを覚えることがある。時によつては餘り長時日の便秘に對して下劑を用いたり、浣腸を行うても便通を得ないために止むを得ず便を掘り出さねばならぬことなどもある。

下劑の方は婦人病に伴うことは割合に少いようであるが、これも屢々便意を催すこともあり、便通の後直ぐにまた催して來ることもあり、跡に残つて居るよう感ずることなどもある。病氣の容態によつては便秘のときでも下劑のときでもその便の性質を調べる必要があつて、

時によつては便通のあつたときにその便をすぐ捨てずに醫師の検査を俟つことを要することがある。大便の中にも膿や血を混えて居ることがある。

便秘の習慣

便秘の習慣になつて居る人を治療して毎日又は二日に一回位の便通があるように調子付けることは必ずしも難事でない。長い間の癖になつて居るのと、家庭の用事の不規律であるために、その順序を破られることが多く、殊にその本人の決心が充分固くないときには、失敗に終り易いものである。特に頑固な便秘の傾きのある人には特に様々の診査をして、様々の工夫をする必要があるものであるが、同じ習慣になつて居る人でも割合に容易に新しい習慣を付けることが出来ることがある。先づ割合に簡単な方法を述べて見て、それで成功せねば醫師に相談せられることにしたいと思う。

婦人は割合に坐業を取る場合が多いことが原因の一つであるが、こ

れは中々變更することは困難である。殊に坐つて仕事をして居ると便意があつても、その仕事の一段落になる前であると、先づその段落にまで達してから排除しようと思つて居る。その間に便意がなくなつて仕舞う。また次の仕事に取掛る、その中途で再び便意が起る、今少しで段落であると辛抱する。その段落に達したときにはまた便意がなくなつて居る。その儘に便通を怠ると云うような状況で次第に便秘の癖を付けるのである。その他には長い時間坐つて居ることが骨盤の中に血の滞りを起し易くて、そのために便秘を助ける。一般に云えば我國の婦人には運動の不足が多い、これも便秘を助ける。云うまでもなく運動の充分な人でも便意のあるときにそれを忍ぶことが、度重なれば矢張り便秘に傾くものである。社交上などの關係から便意の起つたときに辛抱するようなこともその原因になり得るものである。その外にも幾多の原因はあるが、簡単な便秘の癖を除く方法はこの習慣から來て居るような人々に最も有效であると思われるのである。

先づ便通の習慣を付けることである。それには毎日一回定つた時刻に廁に入ることである。その實行を最も守り易いのは毎朝起き出て直ぐ後か、毎晩床に入る前であるが、朝の方が守り易い。然し必ず朝又は晩と云うのではなく、何時でも大凡定まつた時刻であれば宜しい。その他には毎晩果物をその季節に応じて用いるとか、毎朝起きたときにすぐに冷水を飲むと云うようなことも效のあることもあるが、その位で便通のないときには、醫師の指圖によつて軽い下劑を用いる。その下劑は錠劑などになつたものでなく、散劑か水藥などになつたもので、その分量が極めて少量づつ加減の出来るものが宜しい。最初は毎日一回か二回位便通のある程度の分量を用いて、それで都合よい便通が一週か十日位も続けば、次にはその分量を十分の一位減じて毎日続けて用いる。それで都合よく便通があれば、更に一週か十日の後にまた更に十分の一位減じると云うようにして、次第に下劑の量を減じて行く。順序よく運べば三・四ヶ月の後には下劑がなくても便通がある

ようになる。時によつては順序よく運ばぬために跡戻りをせねばならぬこともあるが、忍耐して続けねばならぬ。便通の順がよくなつても便意の起つたときに、我慢して便意を中止することのないようにし、毎朝廁に入るときに便通がなくてもそれを続けることを注意すれば、相當に長い期間には毎朝便通のある習慣が養はれることになる。これは誠に容易い方法のようであるが、いろいろの妨げなどがあつて實行には随分困難があり、忍耐を要するものであつて、容易に成功するとは云われぬが、辛抱強く實行して成功した人もある。

三日・四日又は七日・十日も便秘して居るために下劑を頓服する人があるが、多くの場合には次第に下劑の分量を増さねばならぬようになつて、却つて便秘を甚だしくする傾きが多いと思われるから、便秘の餘り習慣にならぬ間に毎日便通のあるように早く習慣を付けることが必要である。

便通の順當であることは健康を保つ上からは最も大切なものの一つ

であるが、割合に軽く考えられて居るようであり、殊に婦人には便秘の習慣のあるものが多いようであるから、その簡単な治療法の一つを述べて置いたのである。然しこの場合に用いる下劑は醫師の指圖によることが安全である。

以上述べたところは主もな容態のことであるが、その他に頭痛であるとか、めまいや、眠りの不十分なことや、食事が進まず、全く食事が出来ず、嘔き氣があつたり、吐いたり、胸がつかえることもあり、張ることもあり、動悸のすることもあり、息切れのすることもあり、全身がだるいとか、或る部分にしびれる感じがあることもあり、手足の腫れたような感じ、手足や腰・下腹などの冷えることなど挙げ切れぬ程の様々の容態を感じることもある。それ等の容態は何れもその状況を自分の感じのままに述べられることが診察を受けるときには大切なことである。殊にそれ等の容態がどの容態は何時から何時まで、ど

その他の容態

婦人病の診察

のような程度であつたと云うようなことを告げることも大切である。時によつて診察を受ける人が今まで他の醫師の診察を受けて居つたときなどには、自分の感じた容態の方は餘り詳しく話さずに、前醫の診断や、治療法のことばかり話されることがあるが、それも不必要だと云うのではないが、寧ろ病人が自分で感じられた容態、又は時によつては身近に居つた人の見受けた容態を詳しく述べる必要があるのである。

婦人病の診察

今までの容態や現在の容態を聞き取つてから後に醫師は診察をして、その診察によつて知り得た容態と病人の自分で感じた容態とを纏めて診断を付けると云う順序になるものである。

醫師の診察をするときにはその方式はその時々必要に応じて異なる

婦人病の診察

るものである。必要のあるときには婦人病のときにも全身の状況を診査することもある。然しその必要がないと考えるときには生殖器に關した方面ばかりを診査することもある。生殖器の診察には通例は内診と外診とを行うのであるが、外診は内診と同時にすることもある。外診と云うのは主もに下腹の方を診るのである。内診と云うのは生殖器の内部の状況を指の先で觸つて見ることが主なものである。そのときには内外から相應じて變化の有無を検べ、變化のあるときにはその状況を検べるのである。この頃では婦人科専門の醫師に診察を受けるときに内診を拒む人は殆んどなくなつたが、それでも耻かしいと云う感じのために診察し難いような態度を取られることがあるが、診察のときにはなるべく落付いて、下腹や脚に力を入れぬようにして安靜にして居られることは、診査の結果を明かにする上から大切なことである。さなくとも厚い下腹の皮膚や内部の組織などを隔ててその中に在る變化を出来るだけ細かい判断をしようとするのであるから、診察しにくい

診察を受ける病人の心得

産 婦

ようにすることは自分の病氣を正しく診断して貰うためには不利益なことである。また診察のときに膀胱に尿が多量に溜つて居たり、直腸に大便が多く溜つて居るときには診察の結果が明かでないこともあるが、尿通に異常などのある婦人が診察のすぐ前に排尿をしたために、尿の検査を診察と同時に進行することが出来ないで困ることもある。そのようなときには一應醫師に聞いてから後に排尿する方が宜しい。

その他に生殖器の内部の一部分を見るために**産鏡**を入れて、その中を見ることもある。そのときに必要があれば腫から行う治療を同時に行うこともある。

陰部の外側に起つた變化は外から見たり、觸れたりして診査するのであるが、そのときでも内診などを行うて生殖器の内部に變化があるかないかを定める必要のあることが普通である。

その他に**特殊な診察の方法**を行うことは一々擧げ盡されぬ位多くあ

特殊な診察法

る。例えば探りを入れて子宮の中のことを見たり、細い針を刺して瘤や腫れ物の中に膿や、水のようなものや、血などがあるか、それ等のものが全くないかと云うようなことを調べたり、また必要のあるときにはその膿や血のようなものを特別な検査を行うたり、或は組織の一部を掻き取つたり、切り取つたりしてそれを顕微鏡検査を行うたりすることもある。その外にはエックス線で様々の検査をしたり、血液を取つてそれを調べて、病氣や病勢の診断の助けにしたり、その外様々の方法を應用して検査することがある。

尿や大便の検査も必要に應じて行うことがあり、殊に尿の方はその性質や、成分などを調べるためには、特に器械を用いて取つた尿で調べねばならぬこともあり、早朝の第一回の尿を用いねばならぬこともあり、一日分（二十四時間）の尿を検べねばならぬこともある。近頃では尿を用いて動物試験を行うて妊娠の極く早い時期のものを診断したり、またそれを他の診断に應用することもある。

肛門からの診察

その他に猶ほ**肛門の方から診察**をすることもある。このように診察の方法も複雑であるが、それ等は何れも學問の進歩した結果であつて、數十年の昔と比べれば今日では病氣の診断は餘程確實になつて來たものである。然しそれでも中々確診の出來ぬこともあつて、數回の診察・數回の検査の後に漸く確定に達することもないではない。この點は世間でも次第によく知られて來たとは思ふが、今日では検査方法が進んだために却つて一度の診査で確診をすることの出來ぬ場合が多くなつたかのように見える恐れがある。

要するに診断をするに必要な點や、経過を知るために必要なだけの診査は、充分に行わねばならぬものであるから、煩雜であつても辛抱せねばならぬ場合がある。

殊に此頃ではエックス線による診断なども著しい進歩であつてその一・二を擧ぐれば妊娠又は出産のときに胎兒の頭部と骨盤との鈎合で

エックス線を用いる診察

あるとか、雙胎であるかないか、妊娠の初めや、子宮外妊娠、胞状鬼胎、畸形などの診断も多くの場合には容易に出来るものであり、不妊のときなどに卵管の疏通して居るか否かを定めるためにも應用せられる。その他に骨盤内の瘤であるとか、腫れ物などの診断にも助けになることがある。内科・外科その他の病氣のときにも診断上にも應用せられて居ることは多くの人の知つて居るところである。

婦人病の治療

婦人病の治療と云う中にも全身の状況をよくするために薬劑やその他の方法を用いることがある。例えば婦人病のために、或は偶然同時にその他の病氣例えば貧血などがあれば食餌・運動・薬劑などの方法でそれを治すことが、婦人病を治すために必要なことがあると云うように、全身に關係した所謂内科に屬するような病氣でも同時に治療を

婦人病の治療

薬劑療法

せねばならぬこともある。婦人科に屬する處置には様々のものがある。陰部の内部の方即ち膣や、子宮に薬劑を塗布したり、散布したり、注入する方法もあり、強い薬劑やその他の方法を用いて腐蝕をさせたり、焼くこともあり、または薬劑を膏薬や、坐薬にして膣内に入れることもある。薬劑などを用いた後、また薬劑を浸した綿や、ガーゼを膣内や子宮内に挿し込むこともある。そのときには充分によく消毒してあるものでも、普通には五・六時間から十二・三時間位で取り去るべきものである。それ以上留めて置くことは特別な場合だけである。薬店などで脱脂綿とか、脱脂ガーゼと稱えて賣つて居る品は製造のときには消毒と同じようなことが行われて居るが、その後の取扱方が安心出来ぬから、消毒済のものとして取扱うことは危険である。それ故に如何なる場合にでもそれ等のものをみだりに膣内に挿入してはならぬ。例えば月経時などにも消毒綿又は薬綿などと稱えて脱脂綿を膣内に挿入して安心して居る

婦人病の治療

ことは前にも述べた通り危険の恐れがある。

その他にも子宮の口元のところから、小さな尖った刀で突き刺して小さな傷を作つて、血を取ることなどもある。また陰から管針を刺して水や膿を取ることもあり、切り開いて同じく膿や水を取ることもある。これ等は軽いながら手術に属すべきものである。

子宮の位置の悪いときや、子宮の下つて来て居るときに子宮を正しい位置に直して、それを保たせるために器械を入れることがある。このときには器械を入れて居る間は醫師の指圖した通りに監督を受ける必要がある、醫師が命じたときには指圖の通りに陰を洗わねばならぬ。その他の場合にも醫師が陰を洗わせることがあるが、それ以外に自分で考へて醫師の指圖がないに拘らず陰を洗うてはならぬ。陰の洗い方はその度毎に醫師に尋ねるが宜しい。

陰洗滌

陰を洗うにもその温度が様々である。攝氏四十七・八度から五十度

位のもものは**高温洗**と云い、三十五・六度位のもものは通例人肌位温度と云うて居る。それ以下なまぬるいものも用いて居り、冷たいものも用いる。時には水を入れた、或は水で冷したものを用いることがある。通例は人肌位のもを最も多く用いて居る。洗つて陰内が熱くも冷たくも感ぜぬと云うのは大抵攝氏三十七・八度位のものである。實際人肌と云うのは略々三十度内外である。高温のときにはその液の流れ出るときに陰部がその熱さに堪えぬことがあるから、特別の装置を用いることもある。

洗うために用いる液の分量は一定しては居らぬが、大抵一リットル位である。その液は水であることもあるが、多くは藥劑を加えるものである。時には食鹽を加えることもある。

陰を洗うことは自分でも出来るが、最初は中々やりにくい。若し特別な注意を要するときや、病氣の種類によつては安靜を守らねばならぬために自分で出来ぬこともある。

子宮内洗

子宮の中を洗うこともある。これは自分では出来ぬことであるから必ず醫師か看護婦の手を要する。

巻法

巻法は腹部や腰部や陰部に行うことがある。これも温度に様々の程度がある。

温めたコンニャクや、温石、懐爐のようなものを用いることもあり、濡れた手拭などを絞つて當てることもあり、藥劑を浸したり、塗つたりして當てることもある。水囊を當てることもあれば、冷水や、なまぬるの湯で浸した手拭などを當てることもある。これ等は醫師の差圖に従うて行わねばならぬ。これに似たものに此頃では電氣を用いて體內を温める透熱法と云うものもあり、電氣蒲團のようなものもある。

水治法

巻法の他には様々の湯や、水を用いる所謂水治法に属するものがある。冷水摩擦などもその一部と見るべきであるが、全身の入浴にも冷水浴・温水浴などの種類がある。我國で多數の人が入浴して居る浴湯

坐浴・脚浴

の温度は攝氏四十度以上四十五度位までの間のものである。四十度位の湯は冬季には暫く温まつた後に洗場で洗うには少し温度が低過ぎると考える人が多かろうと思われる。小兒殊に新産兒を入れるには餘り温度の高くない方が宜しい。入浴させる室が特別に寒い室でなければ、夏でも冬でも攝氏三十八度以内の湯が宜しい。成人でもなるべく温度の高い湯に入らぬ方が健康上からの利益は多いと思われる。

雨浴

全身浴の外に坐浴・脚浴のような身體の一部分だけを浸す方法もある。その温度や浴中の注意などはそれ／＼指圖に従わねばならぬ。その他にまた灌注浴などもあり、雨浴などもある。坐浴は俗にこしゆと稱えて居つて屢々婦人病の治療に應用せられるものである。

電氣療法

その他には電氣療法のようなものを應用することがあり、天然の日光又は人工太陽燈のようなものを應用することがあり、ラヂウムや、

日光・太陽燈

エックス線のようなものをも應用する。殊に近年ラヂウムや、エックス線の療法即ち放射線療法が發達して來たので、時によつてはその濫

放射線療法

用に陥つたり、その效能を誤つて考えて、そのために危害や、障りの起る恐れのあることを少しも考えずに、危険は全くないもののように考えて、そのために後悔をするようなこともあるから、よく利害の關係を明かにした後に決心するが宜しい。時によつては手術療法を行うか放射線療法を行うかと云うような場合に、手術の方には生命に關する危険がないとは云えず多少の苦痛もあるから、放射線療法の方に傾くことが多いのであるが、放射線療法でもそれを有効に用いるためには時によつて様々の危害や、障りを起すことがないとは云えぬものであり、寧ろ直ちに手術療法を受けた方が安全で確實である場合もある。それ故に素人考えにのみ頼らずに、信頼すべき醫師の指圖に任せて行くことが最も得策である。醫師はその治療に就いては様々の治療法の中から最善の方法であると信ずるものを適用するのである。若しエックス線療法を用いるにしてもなるべくその危険や障りを少くするため、種々の補助療法を併せて用いると云うようにそれぞれの注意をす

るものである。エックス線療法などの效能とその危害とに就いては、今日でも猶ほ盛んに研究せられて居るのであるから、今後まだ著しい進歩を見ることであると思われる。

その他に身體を揉んだり、摩つたり、叩いたりする按摩法や、體操をすることや、その他の運動の方法などを治療の一部として應用することもある。

前に述べた薬剤療法の他に猶ほ病症に應じて種々の細菌から造つた製劑や、動物の臓器などから造つた製劑のようなものを治療上に應用して内服させたり、注射することもある。その中には所謂ホルモン療法とか、**臓器療法**と云うようなものがある。

その他に猶ほ**精神療法**がある。これにも様々の方法があるが、今日の状況では醫師にも病人の側にも醫師は薬剤療法のようなものや、手術療法などばかりを行うものであるように思つて居つて、精神療法の

按摩・體操・運動

臓器療法

精神療法

方面のことになると缺點が多いように思われる。それには醫師に信頼を受けるに足るものが少いたためもあるかも知れぬが甚だ遺憾なことである。吾人の務めねばならぬことは自己の學術を益々進歩させて、その上に精神療法の點からも充分に治療の効果を擧げ得るようにせねばならぬことである。

手術療法

最後に手術療法のことであるが、手術療法には膿の溜つて居るものを切開したり、管針を刺して膿や、液を取るような輕易なことから、開腹をしたり或は腔の方から様々の瘤を取除いたり、胎兒を牽き出したりするような手術に至るまでその種類も多く、その方法も様々である。従つてその手術に對する危険も生命に關しても治療に關しても様様であつて、各々その場合に應じて考慮せられねばならぬものである。今日では手術の方法も進歩して來て、殊に何れの手術にも必要な防腐法、即ち消毒のことが細かい注意の下に行われるようになったために、

その成績にも著しくよい影響を與えるようになった。然し以前の状況から見れば著しく好い成績ではあるが、まだ完全とは行かぬのである。これは防腐の方法ばかりでなく、凡ての診断や治療の方法に就いても同様であつて、まだ今日では百發百中に診断が正しく、治療が良結果であると云い得ぬことは遺憾であるが、その百發百中の日の速かに來るためには撓まぬ努力をして居るのである。

麻酔

麻酔の方法なども次第に進歩して、今日では麻酔のための危険や、苦痛が次第に少くなり軽くなつて居る。然しこれもまだ全く危険がないと云う程度にまでなつて居らぬことは遺憾である。手術を受けねばならぬ病人が屢々麻酔の方法は全身麻酔であるか、局所麻酔であるかと云うようなことを受診の際に問われることがあるが、麻酔の方法なども各々手術者に於てその危害の最も少くて、受療者に苦痛の最も少いと考えられ、その上に手術のために最も都合がよいと考えられる方法を用いるのであつて、手術準備として内臓その他の検査を行つた結

果と、手術それ自身の關係を考へて決定し、猶ほ手術時の狀況によつて按排するものであるから、必ずしも初診のときに考へて居る通りに行うことの出来ぬこともある。それ等の關係を考へて麻酔などは各々手術者の意見に任せて置くべきものである。

以前にはあるところで大手術・小手術と云うような稱え方が行はれて居つたために、時々大手術ですか、小手術ですかと云う問を出されることがあるが、それは大手術と稱するのは開腹をすると云うことを意味し、小手術と云うのは開腹をせず主として腔の方から手術をする、と云う意味のように思はれる。然しこの稱え方は不合理であるから、自分等は少くとも今日では用いて居らぬ。開腹を要する手術でも簡単に速かに終つて、何等心配を要せぬものもあり、反對に腔の方から手術しても困難を極めて、その治癒に就いても生命に就いても心配せねばならぬものもあるから、その區別は餘り適當ではない。

また一般に開腹を要する手術でも卵巢などの手術などは容易で、子

宮の筋腫や、癌腫の手術は困難であると思へて居られるが、必ずしもそう云うことに定まつて居るものではなく、卵巢の瘤の手術でも子宮癌の手術よりも骨の折れるものも少くはない。それ故に病名ばかりでその手術の難易を定めることは出来ぬものである。また子宮癌などは手術をしても全治はせぬものであると考へて、その診断が定まれば絶望の淵に沈む人もあるが、これは今日では謂われのないことであることは既に述べた通りである。

その他に手術の様式を問われることもあるが、これも大體の方針は診断の付くとともに定まることが普通であるが、多くは手術の時になつて、その病氣のある部分の狀況をよく觀察して、手術の進行の工合によつて豫定して居らぬことを行わねばならぬこともある。そのときには本人には勿論側近の人々にも一々協議することなく進行することを常とするものである。

近年著しく進歩した手術として、出産時に必要のあるときに腹壁を

開いて胎兒を取出すことがある。この方法は前に述べた開腹と陰からの手術との比較のように、多くの場合には腹壁の方から取出す方が、陰の方から即ち普通の出産の道から牽き出すことよりも容易であり、従つてその結果も宜しいことが多いのであるが、今日ではまだ開腹分娩の方を恐れる人が多いようである。これ等の點に就いても世間では時々理會を誤つて居ることがある。

手術に就いてはまだ述べたいこともあるが、要するに手術を受ける場合にはその手術者に全然信頼して一任せられることが最も賢いことである。

手術後などに苦痛のあるときに、その苦痛の容體を告げられることは固より必要であるが、みだりに醫師の命に従わずに自分等の考へて處置をするようなことは、時によつて不良な結果を起すことがないとは云えぬ。醫師の方ではその苦痛を聞いたときには、なるべくそれを軽減するように工夫をするが、時によつては止むを得ず辛抱をさせる

こともないとは云われぬ。例えば口が渴くと云うときに液體を濫用すると、そのために嘔氣が起つて容易に止まらなくなつて、食事を與える時期が遅れて、却つて恢復が遅れることもあり、或はその他の不良の經過を取るようになることもあるから、辛抱させるようにせねばならぬことが通例である。そのときに辛抱のない病人は水囊を破つてその水を飲んだことなどもあるが、そのために悪い結果を起したこともある。

全體に見れば今から三・四十年も前に手術を受けた人の苦痛と、近頃手術を受ける人の苦痛とを比べれば、實に著しい差がある。苦痛を訴える人の數から見ても半數にも三分の一にも減じたと思われ、苦痛の程度も同じく軽減せられたと思われる。これは麻酔の方法や、手術の方法の進歩の賜である。その上以前には手術後の苦痛を軽くするために用いる藥劑などもその種類が甚だ少かつたが、今日ではそのような場合に用いられる藥劑も數多く出來たから、苦痛の状況によつては

これを軽くすることにも餘程都合よくなつて居る。手術を受けねばならぬときに、夏でも大丈夫ですかと問われることがある。これは恐らくは以前防腐法のまだ今日のように進歩して居らなかつた時代には、多少時候の影響で化膿したものが多きこともあつたかと思われるが、今日ではその影響は殆んどないと云うて宜しい。ただ臥床に在つても夏の氣候では幾分苦痛が多いであらうが、冬の時候であれば手術者の側では手術後の呼吸器の病氣などに就いて餘分の心配をせねばならぬこともあると云うように、何れの時にもそれ／＼注意を要することがあり、注意をして居るのであるから、何れの時候に於ても心配せずに決心するが宜しい。その他には現在は家庭に差當つた差支えがあるから少し手術を延期しても大丈夫であるか、などと尋ねられることもあるが、それも多くの場合には繰り合せを付けて決行した方がよいと思われる。豫め手術を受けるために時期を定めて置いてもその時になつて差支えの起り易いものであり、無期延期になつ

て病症が進んでから後に止むを得ず餘計な心配をしながら手術を受けるようなことが生じたり、手術の容易く出来るものが全く手の付けられぬようになることなどもあるから、やはり思い付いた時が最もよい時機であると考えて速かに決心するがよいと思われる。

その序に入院したり、手術を受けたりするに、その當日は凶日であるから變更したいと云うようなこともある。これは全く迷信に基くものが多いのであつて謂われのないことであるが、屢々その提言を押し切つて所謂凶日に手術などをして不幸の結果を見たことはない。

その他の迷信は四と九とである。これに追隨して病院などでも病室の番號などにこれを避けて居るものもあることは甚だ遺憾であると思われる。嘗てその證據を得ようと考へて第四號室で死亡した患者と他の病室で死亡した患者との比例を取つて見たことがあるが、四號室の方が却つて他の病室に於けるよりも不幸の經過を取つた患者の少かつたと云う事實もある。その上にこの頃では舶來の迷信にかぶれて金曜

と十三とを嫌う人も少くはないようであるが、これ等の迷信は中々減退せぬように思われることは、文化の進む世の中に不思議なことである。殊に近來はこのような迷信のみならず、氣合術であるとか、心靈術であるとか、指壓療法であるとか、様々の名前で作つて居る素人療治法を信じて、そのために病氣の経過を悪くするような場合も少くはないことは甚だ慨歎に堪えぬことである。

他の専門に屬する病氣でも速かに治ることが出来難くて、治療のために數月數年を要するものがある。婦人病に屬するものにもその類が中々に多い。そのために治療を中絶したり、治療に怠り勝ちで續けて居つたりして、そのために引續いて撓まずに治療を受けても治癒の捗捗しくないものが、一層手間取つたり、或は痼疾のようになつて、不治であるかの如くなるものもある。

急に起つて速かに治るであろうと思われるものでも治療を怠るため

に治癒の遅れたり、或は良い経過を取つて居つたものが、不攝生のために再燃することなどがある。殊に冠・婚・葬・祭やその他の祝儀・不祝儀や、社交などのために不攝生を敢てすることもあり、或は性交のために妨げられることもある。或は家族に病人などの出来たために、割合に容態の軽い婦人病に罹つて居る人がその看護をして、そのために経過を悪くして二人の病人が床に就くようなこともあるから、そのような場合には身寄りの人は殊に注意を與えねばならぬ。

婦人病に罹つて居る婦人は何れも安靜を要するとは定まつて居らぬが、その程度は様々であつて、絶対に安靜を守らねばならぬもの、寢返り位はしても差支えないもの、臥床をして居るが兩便位には起きて出られるもの、ある程度まで家事などに携つても過度の運動をせぬことを要するもの、普通の家事位の程度を許すものなどその程度を異にする。また時によつては特に規律正しく一定度の運動を勧めねばならぬものもある。それ等の程度は醫師に相談してその指圖に従うが宜し

安
靜

い。家庭の状況が異なるに従うてその程度を守り難いことも少くはないと思われるが、病氣のときには不攝生のために経過を長びかせたり、容態の跡戻りをしてはならぬから、困難はあつても適當な養生を守るようにせねばならぬ。

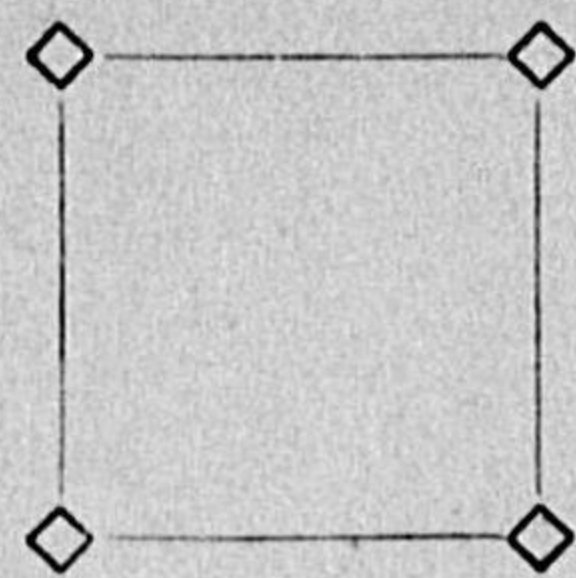
結 び

以上述べて來たことで産科婦人科に關係したことの極めて粗らましを述べたが、まだ足りぬことが随分多いように思われ、この頃の婦人雑誌や、その外の通俗の著述などに述べられた醫學知識よりも程度の低いものであるように思われるが、病氣に罹つて醫療を受けたり、妊娠のときに醫師の指圖を受けたりするときにそれを正しく受入れられるためには幾分役に立つかと考えて居る。醫師の側から見ると此頃の病人にはその知り得た範圍の醫學知識に基いて醫師の云うところを批

評判断して、正當な醫師の勸告や、注意をも疑うような傾きが多くなつたと思われる。そのために懇切に話されたことを曲解したり、誠實に告げられたことに疑いを容れたりすることもある。これ等は治療と云う點から見れば誠に不利益なことであつて、そのために病氣の治療すべき機會を失うような場合も少くはないと思われる。信頼すべき醫師の云うところであれば、眞直にそれを受入れて、その云うところに従うてなるべく速かに、且つ完全に病氣の治るように、危険の救われるようにせねばならぬものである。

それ故に病氣になつたときや、妊娠したために醫師や、産婆を選定するときには、情實などに捉われずに自分が信用して何事も一任することの出来ると思う人を選んで、その人の意見や指圖を信じて治療や處置の方針を誤らぬようにすることは最も大切なことである。

昭和九年九月十日印刷
昭和九年九月十五日發行



9. 9. 11

產科婦人科讀本奥付
定價壹圓貳拾錢

著者 木下正忠

發行者 東京市京橋區京橋三ノ四 鈴木利貞

印刷者 東京市牛込區山吹町一九八 山本禎男

發行所 株式會社 東京市京橋區京橋三ノ四 日本評論社

電話京橋 (56) 六六六六
振替東京 九九九九
一四三二一

印刷所 東京市牛込區山吹町一九八 宗文社

~~56~~
~~3/50~~

495
K146

終